

# 財政学II

第5回

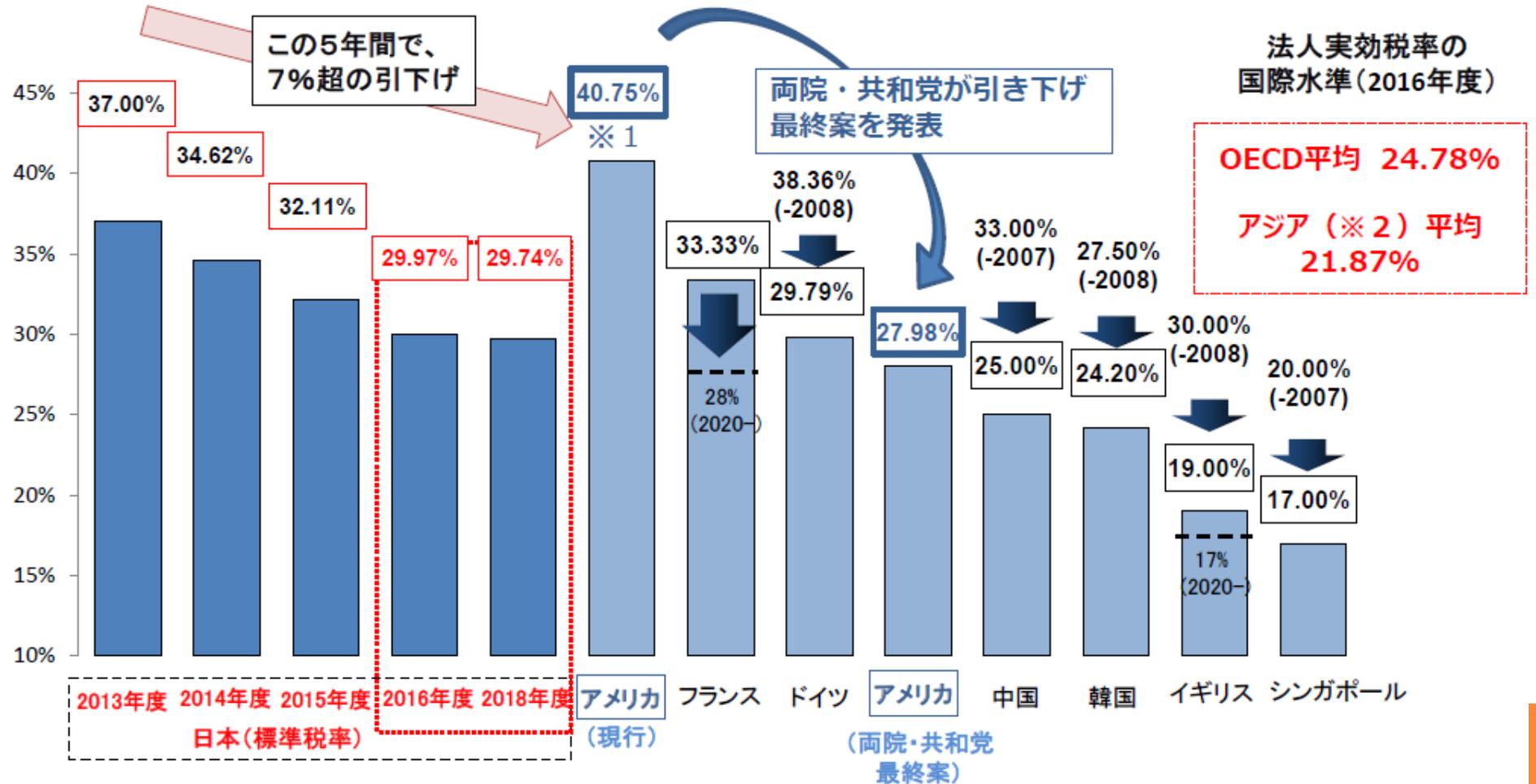
佐藤主光(もとひろ)

一橋大学経済学研究科・政策大学院

1

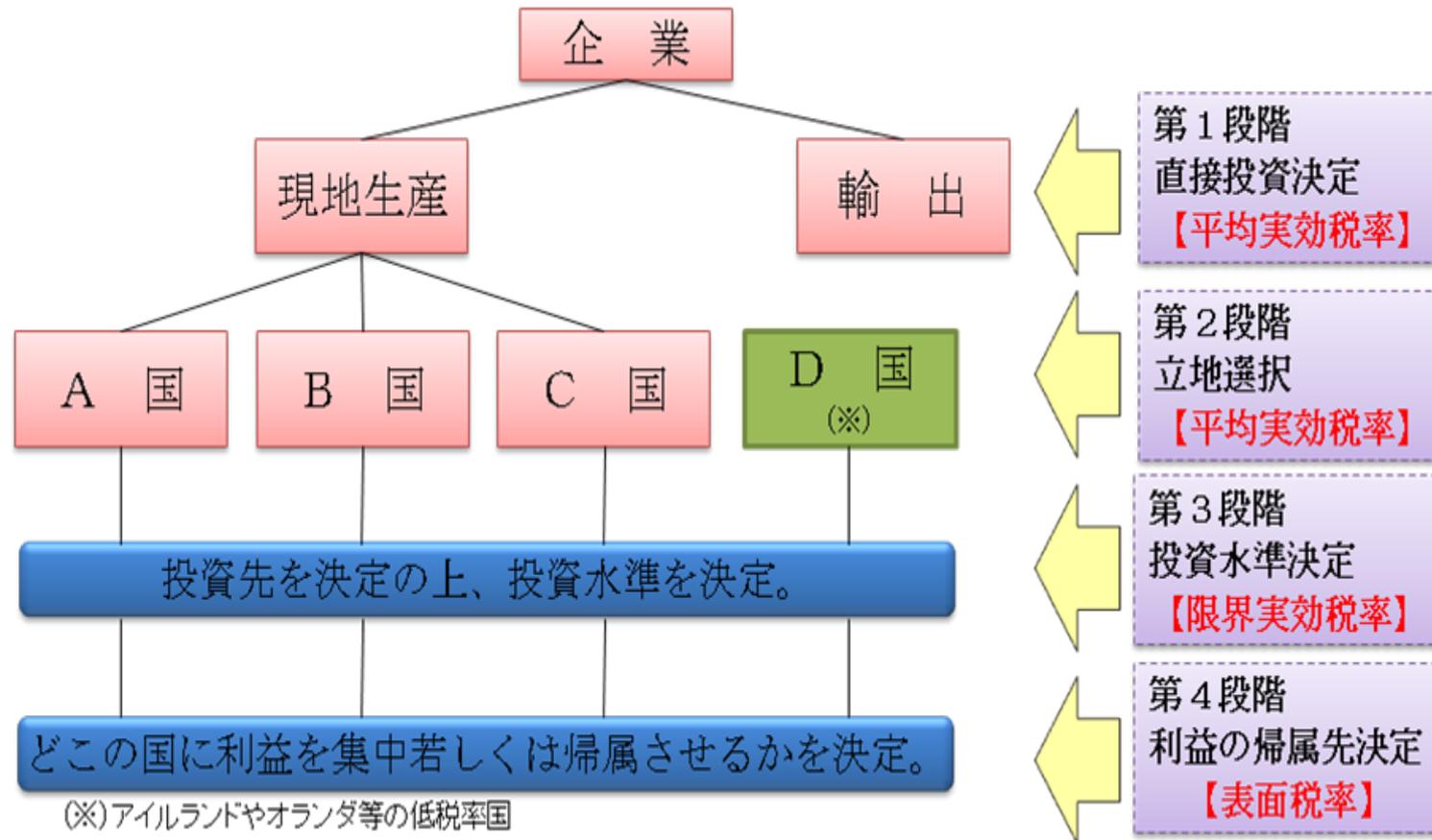
# グローバル化と法人税

# 法人税率の国際比較

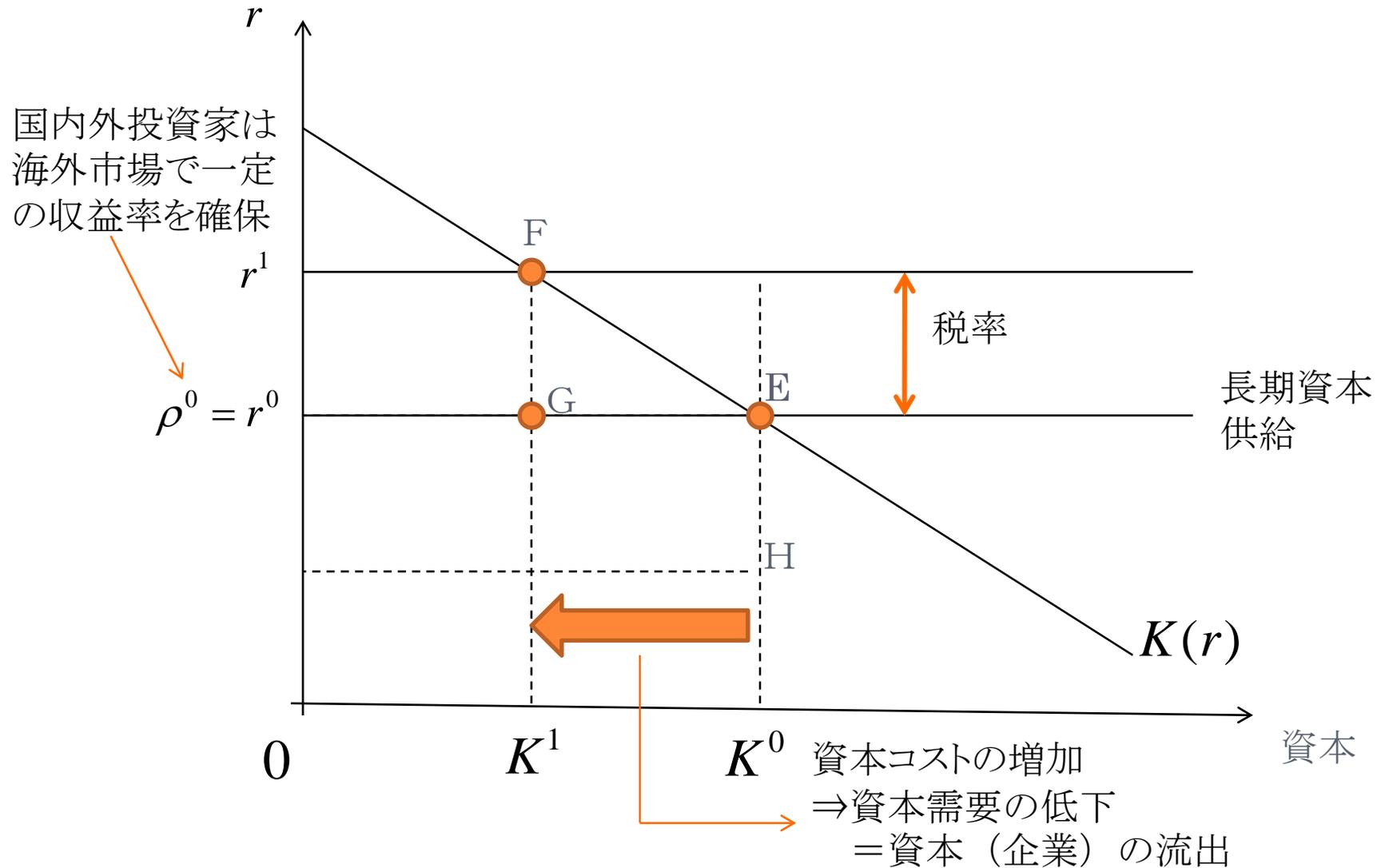


出所: 経済産業省

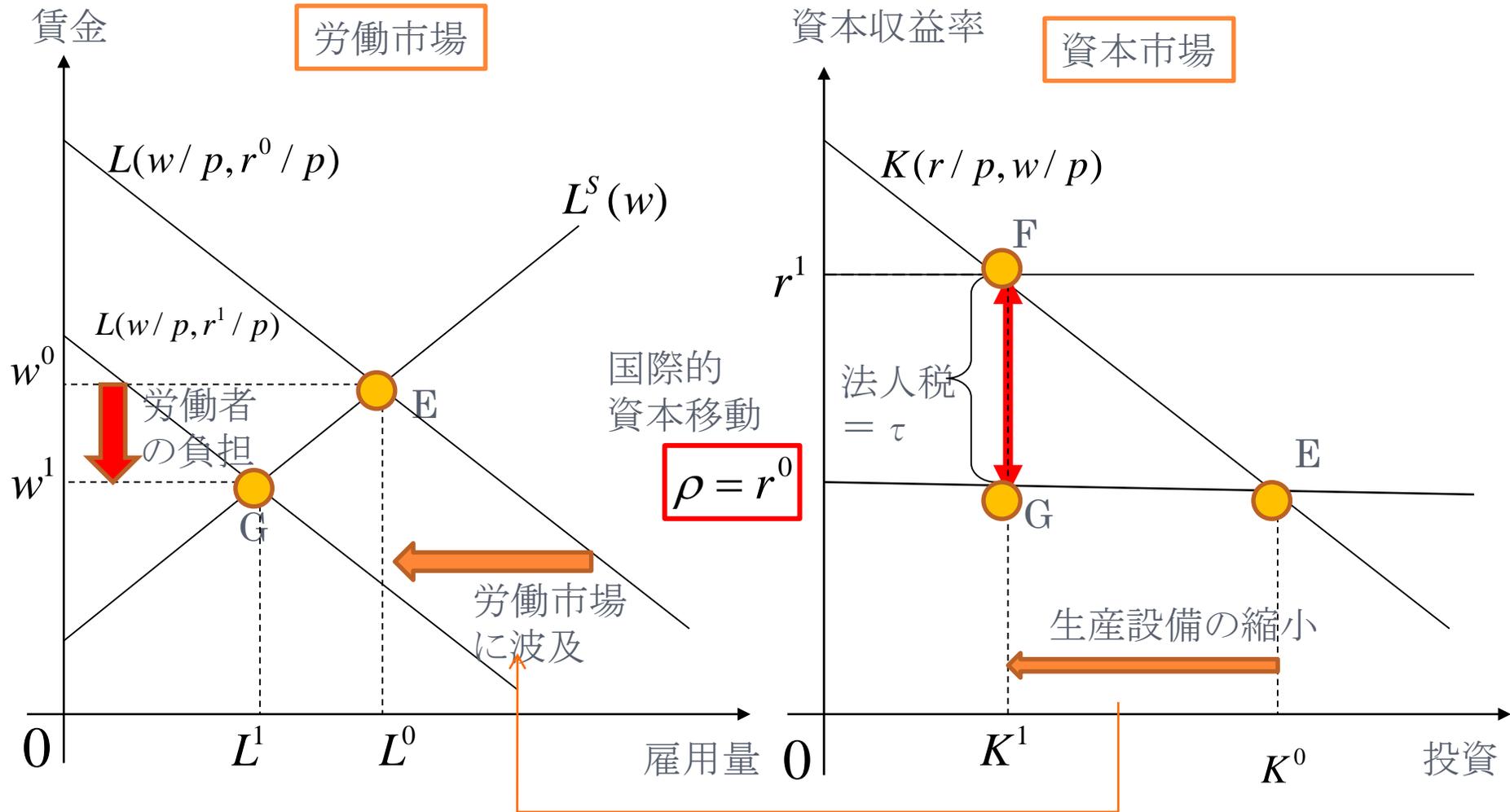
図表1 多国籍企業の意思決定とそれに影響を及ぼす法人税率



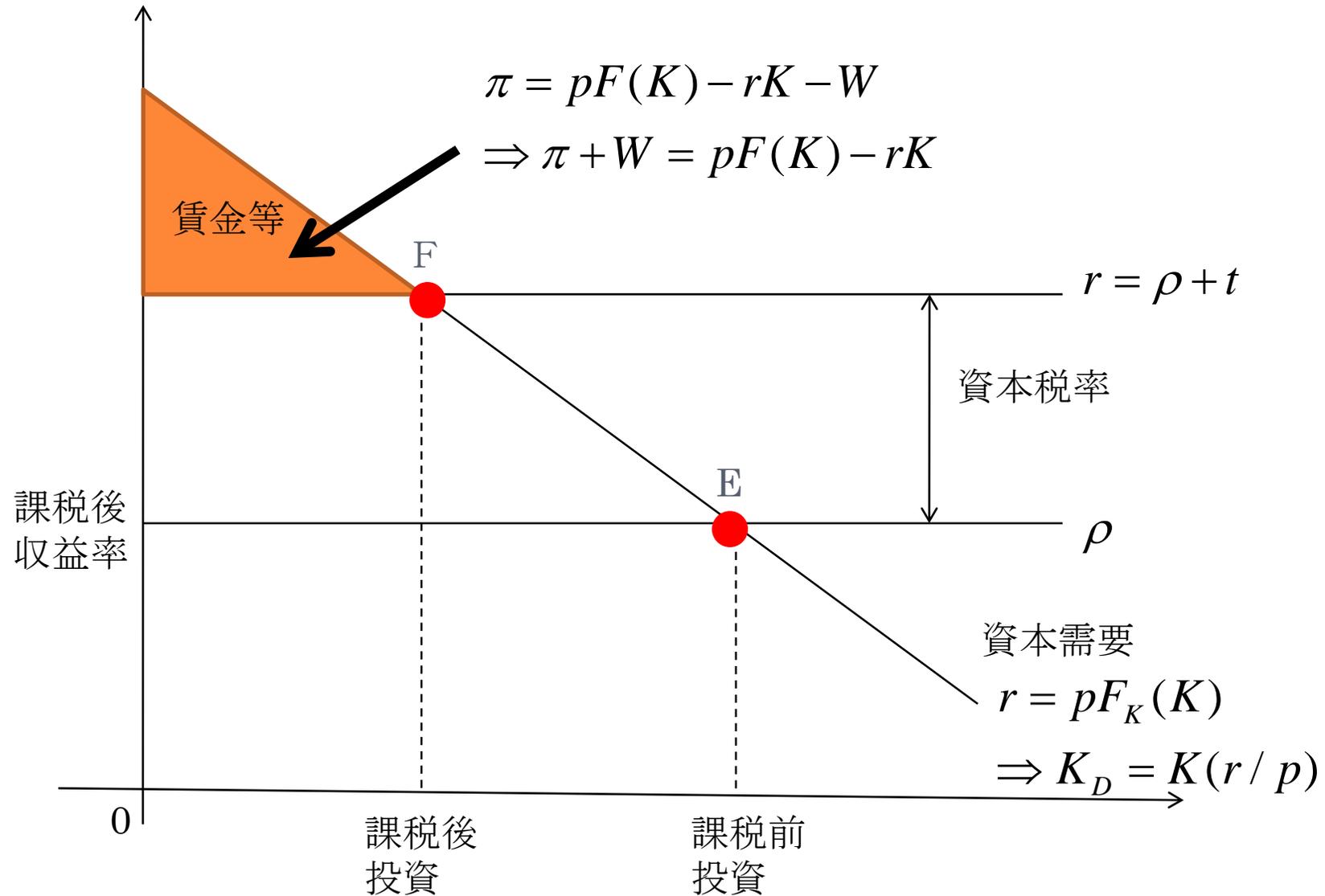
# グローバル化と法人税



# 法人課税の一般均衡：再掲



# グローバル化と法人税(その2)

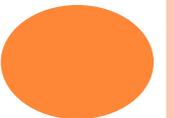


## 参考:法人税の経済的帰結

		帰結
公共選択＝ 政策決定	税率(経済的実効税率)の 選択	国際的租税競争
私的選択 ＝民間の反応	経済的実効税率の部門 間・企業間格差	生産非効率性 (生産過程を歪める)
	資金調達の変み	借入(負債)に偏った資金調達 ⇒破産リスクの増加
	税負担の転嫁	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 製品価格の上昇 消費者負担 国際的競争力の低下</li> <li>➤ 雇用・賃金の減少 労働者負担</li> <li>➤ 投資収益率の低下 国内貯蓄を阻害・資金流出</li> </ul>
	税の回避	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 企業・利益の流出</li> <li>➤ 租税回避</li> </ul>

# 法人税の経済効果

- 理論・実証面で法人税は他の税目に比して相対的に経済成長へのマイナス効果が大きい
- ◆ 実証分析(例)
  - Kneller , Bleaney and Norman (1999) Fiscal policy and growth: evidence from OECD countries, J Pub E
    - ✓ 分析:Barro成長回帰分析をベース
    - ✓ 法人税を含む所得課税等“歪みを与える税”の比重が高いほど成長率は低下
    - ✓ データ:OECD 22カ国パネル(1970–95)
  - Lee and Gordon (2005) Tax structure and economic growth, J Pub E
    - ✓ 法人税は経済成長にマイナス効果を及ぼす
    - ✓ データ=途上国を含むパネル( 1970–1997)
  - J.Arnold (2008) Do Tax Structures Affect Aggregate Economic Growth? OECD
    - ✓ 法人課税から消費課税へのシフト(税収中立)は経済成長を高める
    - ✓ データ=21 OECD 諸国パネル( 1971-2004)



## 参考:消費税は成長促進的...

- (税率が一定の) 中長期的にみると消費税は法人税・社会保険料など他の税に比べて成長との親和性が高い
- 税収を一定としたとき、消費課税の比重を上げ、保険料・法人税の比重を下げる方が成長率にプラスに寄与するとの実証研究もある

Effect on growth		Revenue neutral tax reduction			
		PIT/SSC	CIT	VAT	Property tax
0.1% increase in tax revenue share	PIT/SSC		+0.101%	-0.096%	-0.135%
	CIT	-0.118%		-0.204%	-0.240%
	VAT	+0.092%	+0.216%		-0.012%
	Property tax	+0.155%	+0.271%	+0.071%	

Source: Arnold (2008) DO TAX STRUCTURES AFFECT AGGREGATE ECONOMIC GROWTH? EMPIRICAL EVIDENCE FROM A PANEL OF OECD COUNTRIES, ECONOMICS DEPARTMENT WORKING PAPERS, OECD  
Data: OECD countries



# 経済のグローバル化と資本課税

(DS-DI/GDP)

AETR=Capital tax revenue / tax base

Capital taxes  
CAP

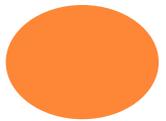
- 経済のグローバル化に伴い法人税を含む資本課税の(実効)税率が低くなっていることが実証研究からも示唆される
- ✓ グローバル化=開放度(国内貯蓄と投資のギャップ)
- ✓ 資本課税=法人税+資本所得課税
- ✓ 実効税率=税金÷課税ベース

Capital mobility	-0.180*** (0.060)
Country size	0.017*** (0.005)
GDP (lagged)	0.066*** (0.017)
Inflation (lagged)	-0.030 (0.037)
Unemployment (lagged)	-0.498*** (0.112)
Debt ratio (lagged)	0.108* (0.060)
Observations	693
Countries	23

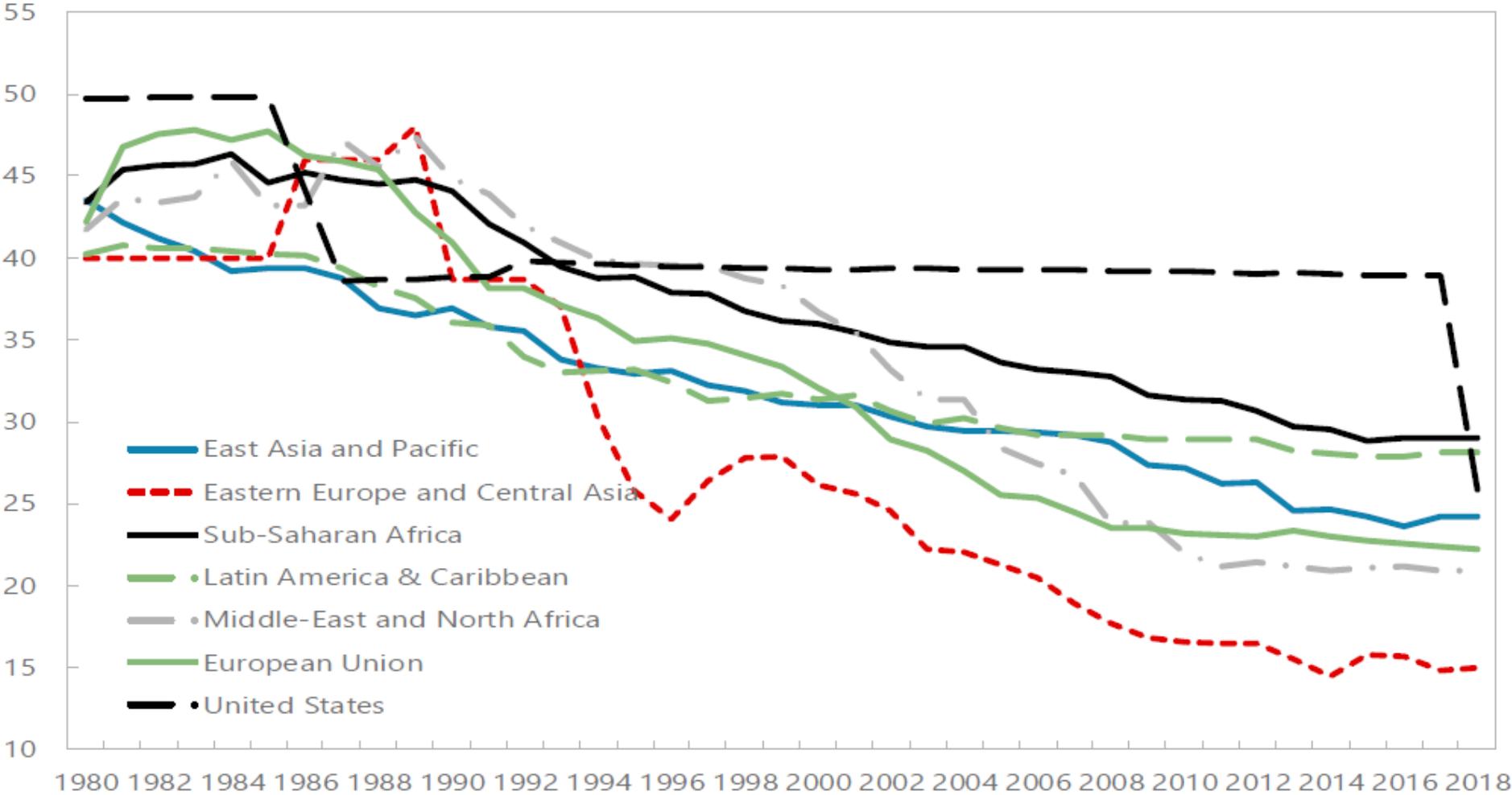
1965  
~2000

OECD

Source: WINNER (2005)



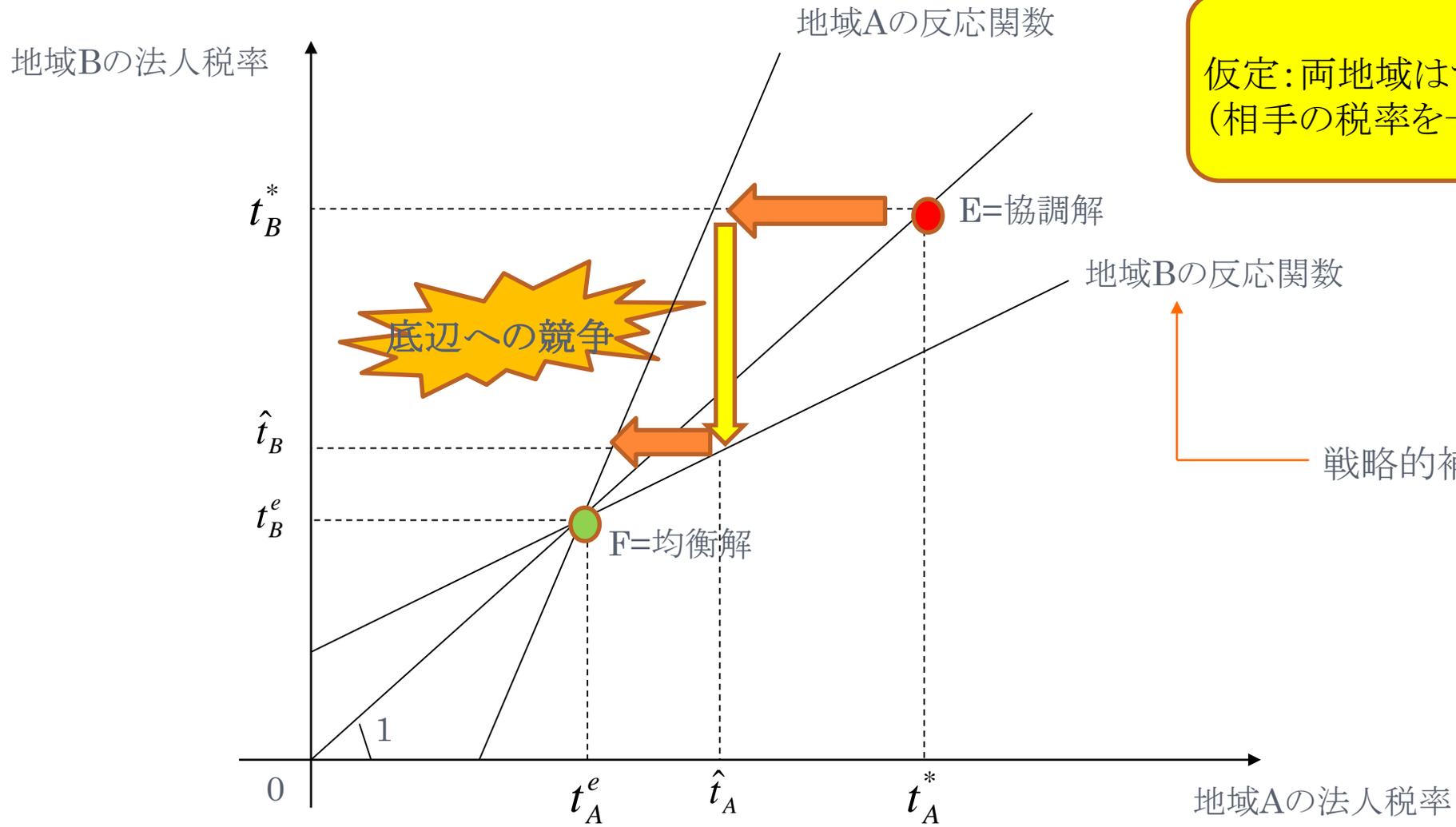
**Figure 1. Top Corporate Income Tax Rates, Regional Averages (in percent)**



Source: FAD Tax Rate Database (Internal)

Sebastian Beer, Alexander Klemm, and Thornton Matheson(2018) Tax Spillovers from U.S. Corporate Income Tax Reform, IMF Working Paper

# 租税競争の帰結



仮定: 両地域はナッシュ的に  
(相手の税率を一定として) 選択

図表6:

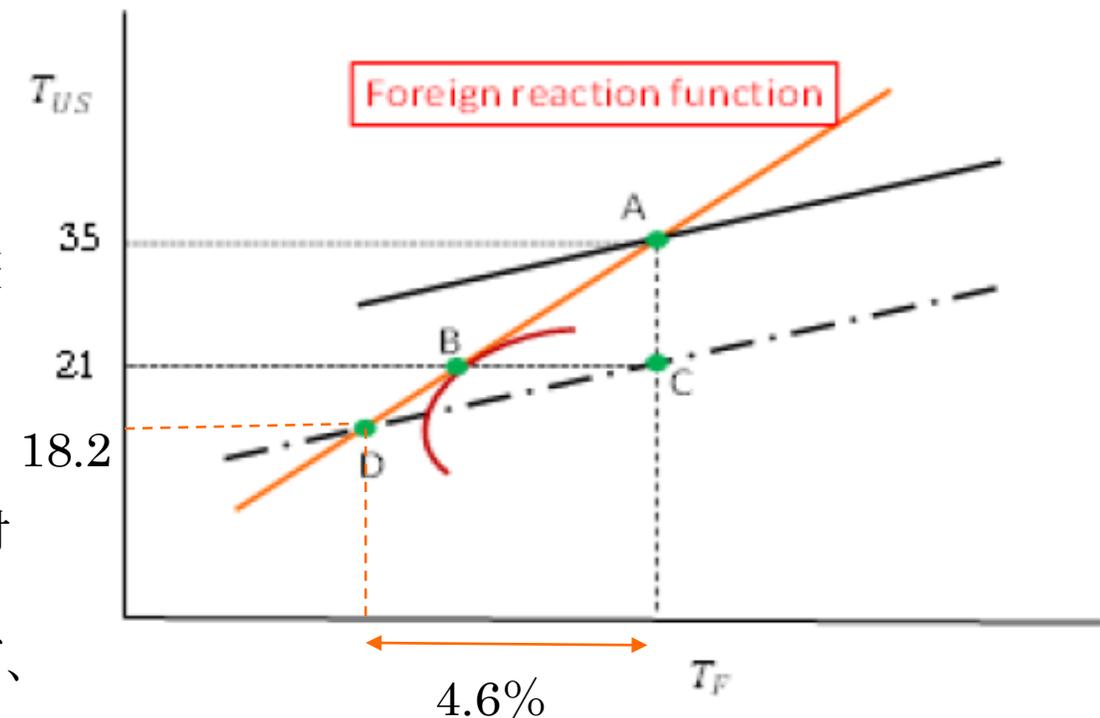
A国 \ B国		法人税率	
		25%	13%
法人税率	25%	(Aの利得、Bの利得) =(25, 25) =(25% * 100, 25% * 100)	(0, 26) =(0, 13% * 200)
	13%	(26, 0) =(13% * 200, 0)	(13, 13) =(13% * 100, 13% * 100) =ナッシュ均衡



## 参考：国際的租税競争

- 米国税制改革(The Tax Cuts and Jobs Act (TCJA))は連邦税率を35%から21%に引き下げ  
⇒国際的租税競争を誘発？
- Beer, Klemm and Matheson (2018)
- 米国が Stackelberg leaderかNash playerとして振る舞うケースにおける租税競争のインパクトを推計
- 米国と(集計化された)それ以外の国との間での租税競争
- ✓ The Stackelberg =他国は税率を3.8%引き下げて対抗
- ✓ The Nash game =他国は合計4.6%税率を引き下げ、米国は追加で税率を2.8% (21%⇒18.2%)引き下げ

Figure 16. Strategic Interactions in Tax-Setting



Nigel Chalk, Michael Keen, and Victoria Perry(2018)<sup>15</sup>  
The Tax Cuts and Jobs Act: An Appraisal ” IMF Working Paper

参考:

競争のタイプ	特徴	具体例
良い競争	切磋琢磨型	<ul style="list-style-type: none"><li>・規律づけ(効率化)</li><li>・地域振興策の「アイデア合戦」</li><li>・新興企業・産業の育成</li></ul>
悪い競争	ゼロ・サムゲーム型	<ul style="list-style-type: none"><li>・補助金の陳情合戦</li><li>・租税競争(既存企業の誘致合戦)</li><li>・Not In My Backyard (迷惑施設等の押し付け合い)</li><li>・返礼品競争＝ふるさと納税の実態</li></ul>



Table 2.1: Comparison of Patent Box Regimes

パテントボックス  
= IPに対する優遇税制



IPの立地に影響  
= 新しい租税競争

Tax Factors	Netherlands	Spain	United Kingdom
Headline tax rate	5%	12%	10%
Year Enacted	2007, 2010	2008, 2013	2013
Qualified IP	Patents and IP derived from technological R&D activities	Patents, secret formulas, processes, plans, models, designs, and know-how	Patents, supplementary protection certificates, regulatory data protection, and plant variety rights
Applicable to existing IP?	IP after 31/12/2006	Yes	Yes
Applicable to acquired IP?	Yes, if further self-developed	No	Yes, if further developed and actively managed
Includes embedded royalties?	Yes	No	Yes
Can R&D be performed abroad?	Yes, for patented IP; strict conditions for R&D IP	Yes, but must be self-developed by the licensor	Yes
Qualifying income	Net income from qualifying IP	Net income from qualifying IP	Net income from qualifying IP

### Patent Box Policies

Gaétan de Rassenfosse, University of Melbourne  
2015

## 国際的租税競争の実証

- Altshuler=Grubert (2006):

- ✓ 米国の製造産業の子会社データからホスト国58か国における事後的実効税率の変化(=1998年と1992年の間での税率差)の決定要因を分析
- 各国の資本税率の選択が他国の税率に対して正の方向に反応(他国が減税すれば、同様に自国も減税)

- Devereux et al(2008)

- ✓ 1982年～1999年のOECD21か国を対象としたパネル分析。
- ✓ 法定税率と限界実効税率を各国政府の戦略変数
- 他国の税率(の加重平均)減は自国の税率引き下げを誘発



## A. グローバル企業は払うべき（価値が創造される） ところで税金を支払うべきとの観点から、 国際課税原則を再構築

### (1) 電子経済の発展への対応

電子経済に伴う間接税に係る問題への対応について、海外からのB2C取引に対する消費課税のあり方等に関するガイドラインを策定した。一方、直接税に係る問題については、以下の(2)～(6)の勧告を実施することで、対応可能であり、物理的施設を伴わない事業活動に対し、PE(Permanent Establishment)という現行の物理的概念を超えて事業(=課税)の場所を認識することについては、未だ電子経済はそこまでの発展段階に至っておらず、現時点では不要と結論。

#### 行動1 電子経済の課税上の課題への対応

### (2) 各国制度の国際的一貫性の確立

各国間の税制の隙間を利用した多国籍企業による租税回避を防止するため、各国が協調して国内税制の国際的調和を図った。

- 行動2 ハイブリッド・ミスマッチ取極めの効果の無効化
- 行動3 外国子会社合算税制の強化
- 行動4 利子控除制限
- 行動5 有害税制への対抗

### (3) 国際基準の効果の回復

伝統的な国際基準(モデル租税条約・移転価格ガイドライン)が近年の多国籍企業のビジネスモデルに対応できていないことから、「価値創造の場」において適切に課税がなされるよう、国際基準の見直しを図った。

- 行動6 条約濫用の防止
- 行動7 人為的なPE認定回避
- 行動8-10 移転価格税制と価値創造の一致

## B. 各国政府・グローバル企業の活動に関する 透明性向上

### (4) 透明性の向上

多国籍企業による租税回避を防止するため、国際的な協調のもと、税務当局が多国籍企業の活動やタックス・プランニングの実態を把握できるようにする制度の構築を図った。

- 行動5 ルーリング(企業と当局間の事前合意)に係る自発的情報交換
- 行動11 BEPS関連のデータ収集・分析方法の確立
- 行動12 タックス・プランニングの義務的開示
- 行動13 多国籍企業情報の報告制度  
(移転価格税制に係る文書化)

## C. 企業の不確実性の排除と予見可能性の確保

### (5) 法的安定性の向上

BEPS対抗措置によって予期せぬ二重課税が生じる等の不確実性を排除し、予見可能性を確保するため、租税条約に関連する紛争を解決するための相互協議手続きをより実効的なものとするを図った。

#### 行動14 より効果的な紛争解決メカニズムの構築

### (6) BEPSへの迅速な対応

BEPS行動計画を通じて策定される各種勧告の実施のためには、各国の二国間租税条約の改正が必要なものがあるが、世界で無数にある二国間租税条約の改定には膨大な時間を要することから、BEPS対抗措置を効率的に実現するための多数国間協定を2016年末までに策定する。

#### 行動15 多国間協定の開発

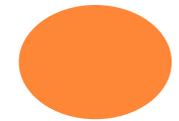
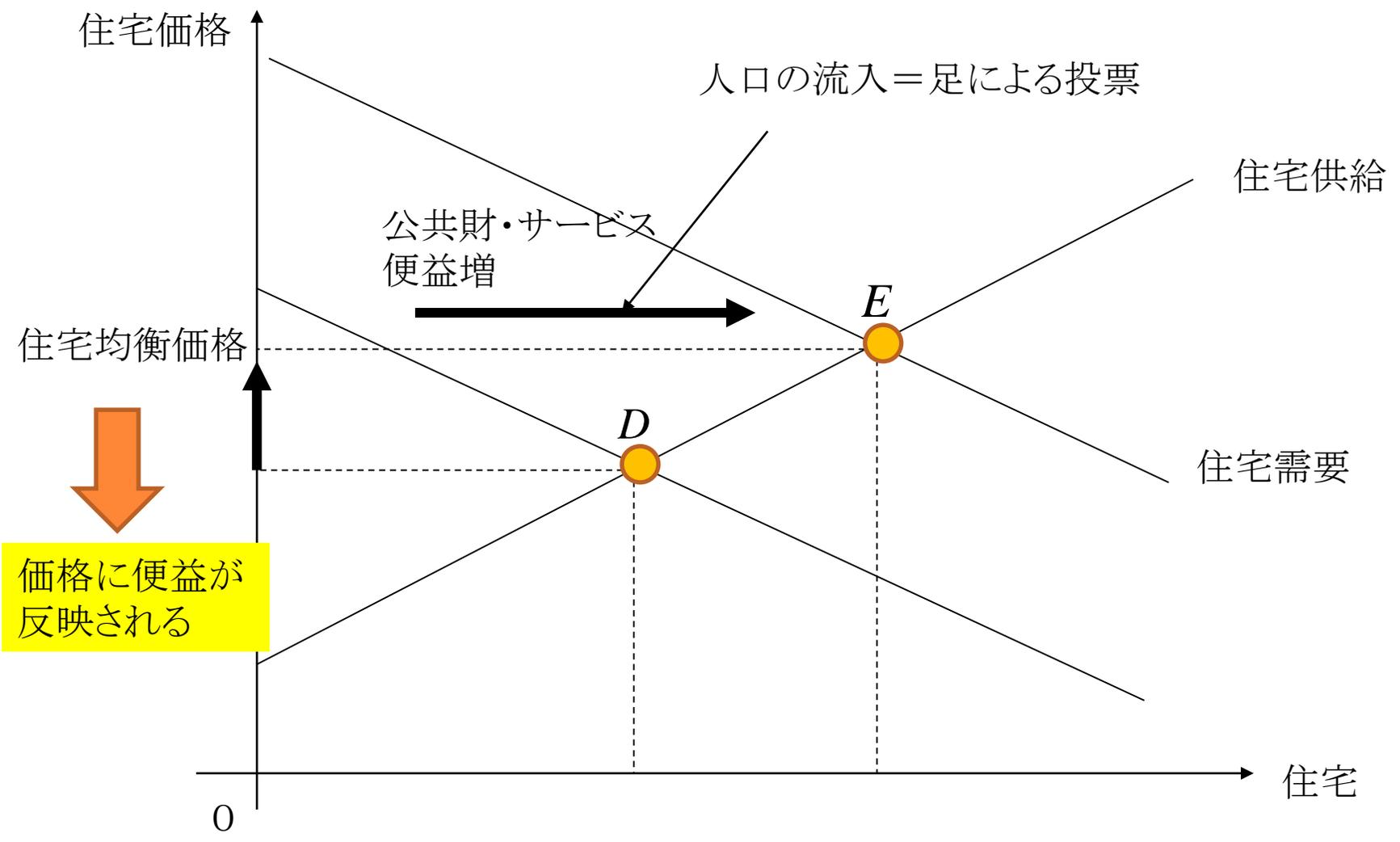
# 税の資本化

## 「足による投票」と資本化

- 地方公共サービスからの受益、固定資産税の負担が土地・住宅の価格に反映
- 土地・住宅価格
  - =  $F$ (受益、税負担、環境要因)
  - = 定数項 +  $\alpha$  \* 公共サービス +  $\beta$  \* 地方税負担 +  $\gamma$  \* 環境要因 + かく乱項
- 土地・住宅の購入 = 将来の固定資産税の支払い義務も抱き合わせで購入
- 土地・住宅への課税 ⇒ 現在の土地・住宅保有者に帰着
- ポイント: 「足による投票」 = 住民移動に伴う土地・住宅需要の変化



# 地域内住宅市場



# 土地(住宅)価格と固定資産税の「資本化」

土地価格  $V = \sum_{t=1} \frac{B(g) - \tau V}{(1+r)^t} = \frac{B(g) - \tau V}{r}$

地方公共財  $B(g)$

固定資産税率  $\tau$

市場金利  $r$

将来の固定資産税支払い  $\tau V$

$V = \frac{B(g)}{r + \tau} = V(g, t)$

現在の地価に反映

(+) (-)

Oates, W.E., 1969. The effects of property taxes and local public spending on property values: An empirical study of tax capitalization and the Tiebout hypothesis. *Journal of Political Economy* 77(6), 957-971.

林正義, 2003. 「社会資本と地方公共サービス: 資本化仮説による地域別社会資本水準の評価」『経済分析』(171), 28-46, 2003.

被説明変数：賃貸住宅の割引現在価値、推定方法：固定効果モデルと変量効果モデル、サンプルの大きさ=通常の推定では 230、2SLS では 184

有意に  
マイナス

	固定効果モデル	変量効果モデル	固定効果モデル (2SLS)	変量効果モデル (2SLS)
固定資産税実効税率	-0.478 *** (0.042)	-0.527 *** (0.043)	-0.496 ** (0.252)	-0.816 *** (0.146)
市町村社会資本ストック	0.033 (0.062)	0.154 ** (0.061)	0.620 (0.506)	0.621 *** (0.183)
人口一人当たり県民所得	-0.213 (0.272)	-0.153 (0.256)	-2.078 * (1.328)	-0.105 (0.499)
宅地面積	1.388 *** (0.359)	0.650 *** (0.113)	1.475 ** (0.864)	0.213 (0.180)
人口密度	0.489 ** (0.268)	0.224 *** (0.067)	-0.001 (0.627)	0.193 *** (0.081)
地方交付税依存度	-0.102 ** (0.051)	-0.100 ** (0.050)	-0.204 ** (0.113)	-0.124 ** (0.081)
人口あたり被生活保護者数	-0.082 ** (0.047)	-0.004 (0.043)	-0.008 (0.106)	0.009 (0.065)
人口当たり犯罪認知件数	0.037 (0.041)	0.065 (0.041)	-0.503 (0.081)	0.055 (0.061)
人口当たり離婚件数	0.693 *** (0.123)	0.853 *** (0.109)	0.666 *** (0.253)	0.786 *** (0.179)
第一次産業比率	-0.179 ** (0.057)	-0.175 *** (0.050)	-0.882 (0.110)	-0.005 (0.074)
定数項	3.353 (2.858)	4.427 *** (1.218)	-5.019 (7.974)	-0.385 (2.120)

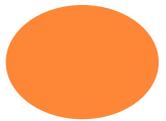
財政要因  
の「資本化」

推計期間：1983年、1988年、  
1993年1998年、2003年  
サンプル：東京都を除く46道  
府県

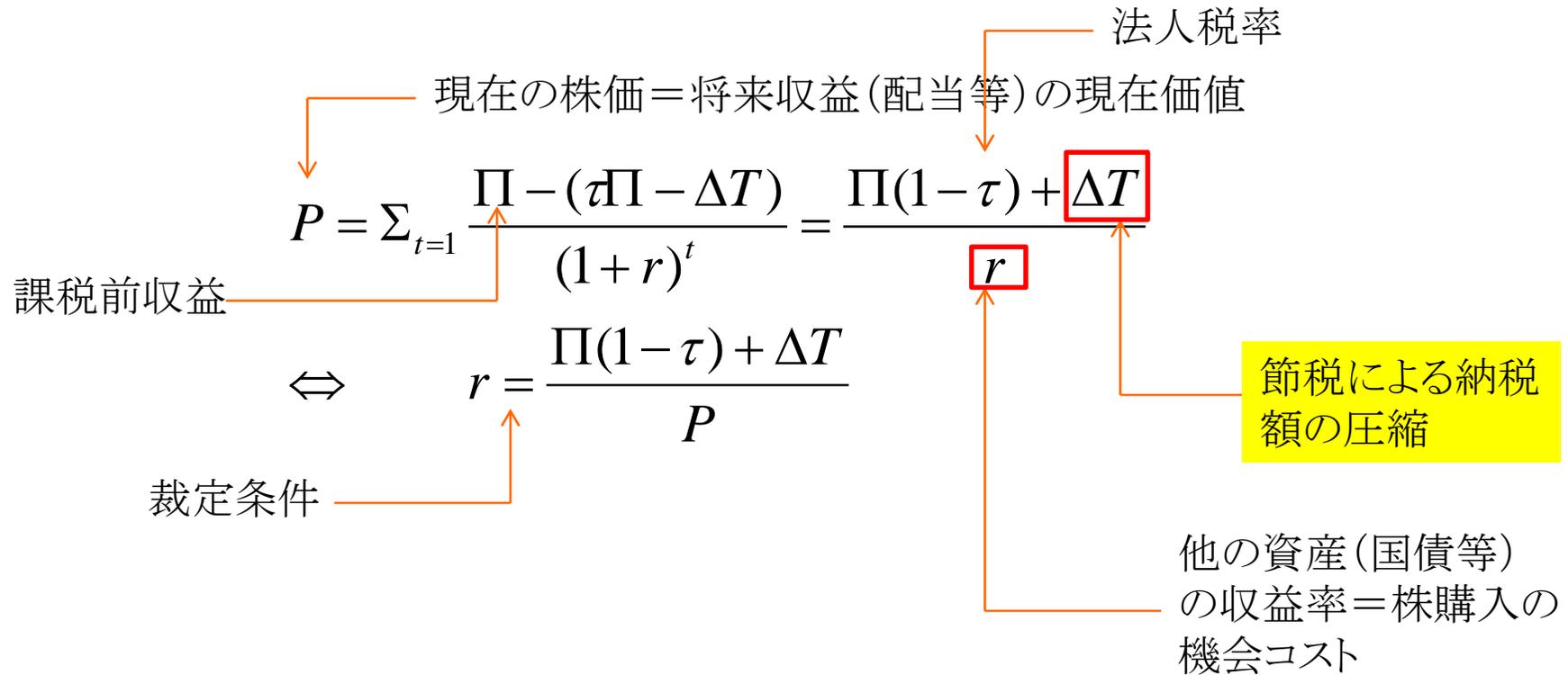
注：その他、経済要  
因等を説明する変数  
の効果は一部略

注：\*\*\*は 1%、\*\*は 5%、\*は 10%の有意水準で帰無仮説が棄却されたことを示し、括弧内の数値は係数の標準誤差を示す。また、2SLS は 2 段階最小二乗法による推定結果である。なお、年次ダミーは、通常の推定では 4 ヶ年分、2SLS を用いた推定では 3 ヶ年分含まれている（報告結果は省略）。被操作変数＝固定資産税実効税率、人口当たり県民所得と市町村社会資本。操作変数＝すべての外生変数と、説明変数と被操作変数の 1 期前の値。

出所：宮崎・佐藤  
(2008)



# 参考: 節税 (タックス・プランニング) の利益は？



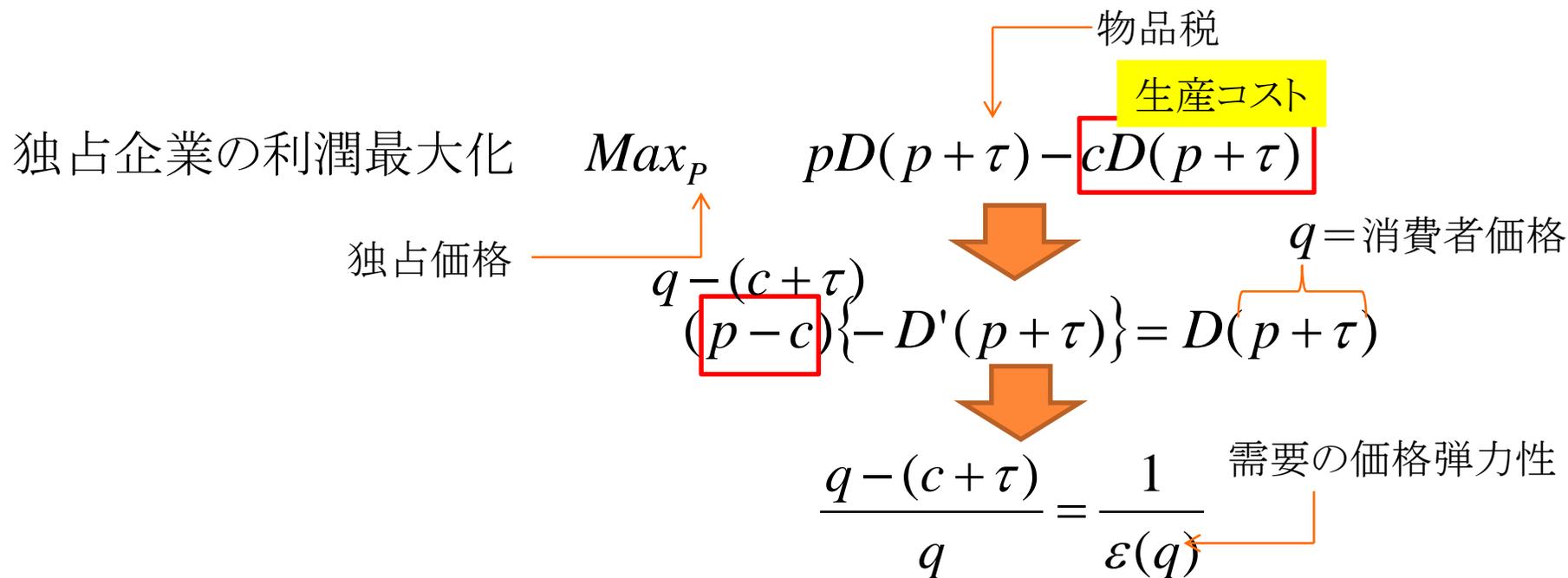
- 将来の節税の利益は現在の株価に反映
- 節税額 ↑ ⇒ 株価 ↑
- 新たに株を購入する投資家の収益率は (節税機会のない) 他の資産の収益率と同じ ⇒ 節税の利益は現在の株主に帰着

# 課税と市場構造

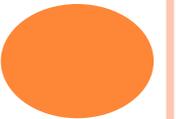
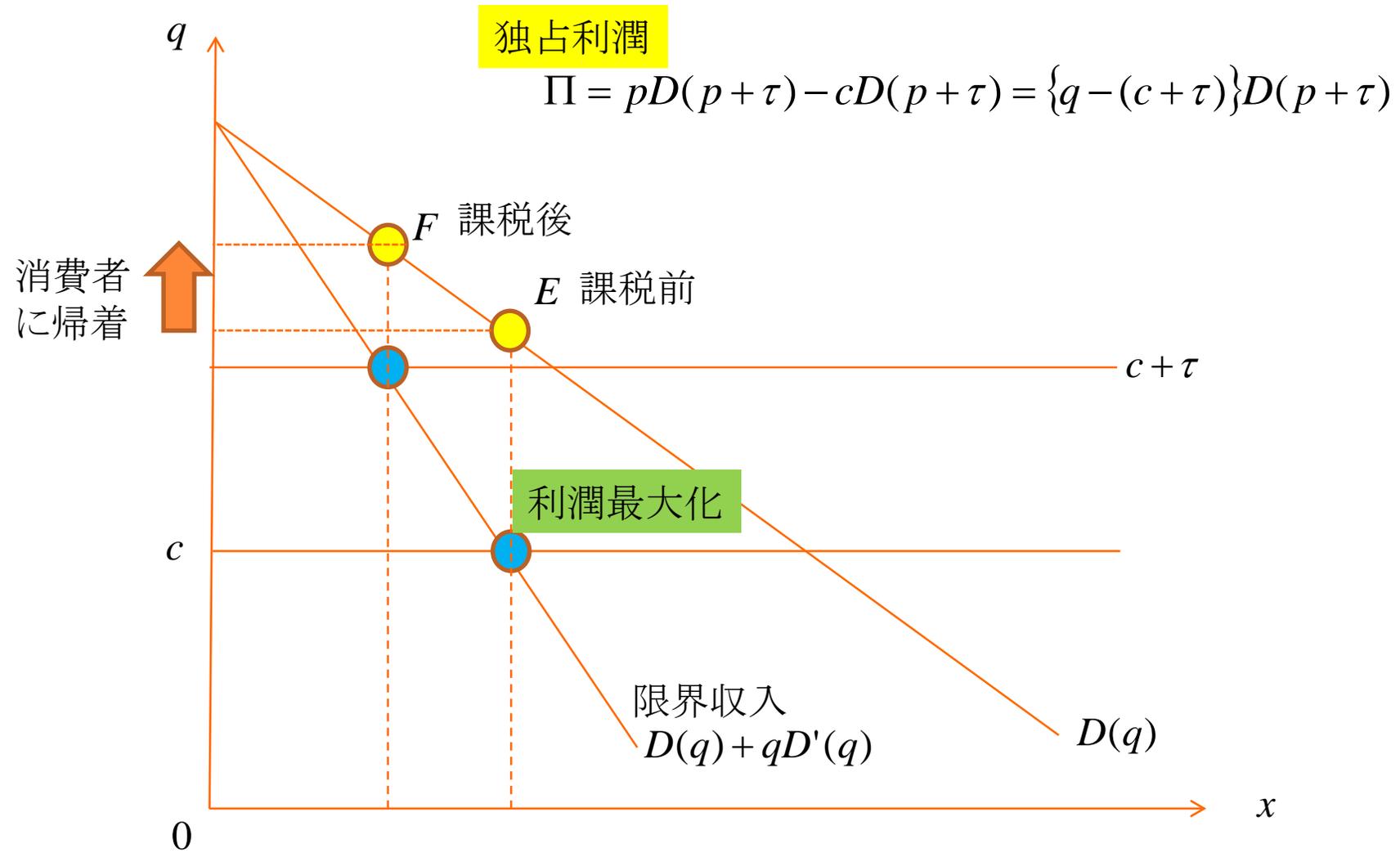


# 独占企業の場合

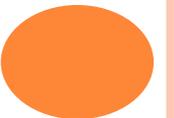
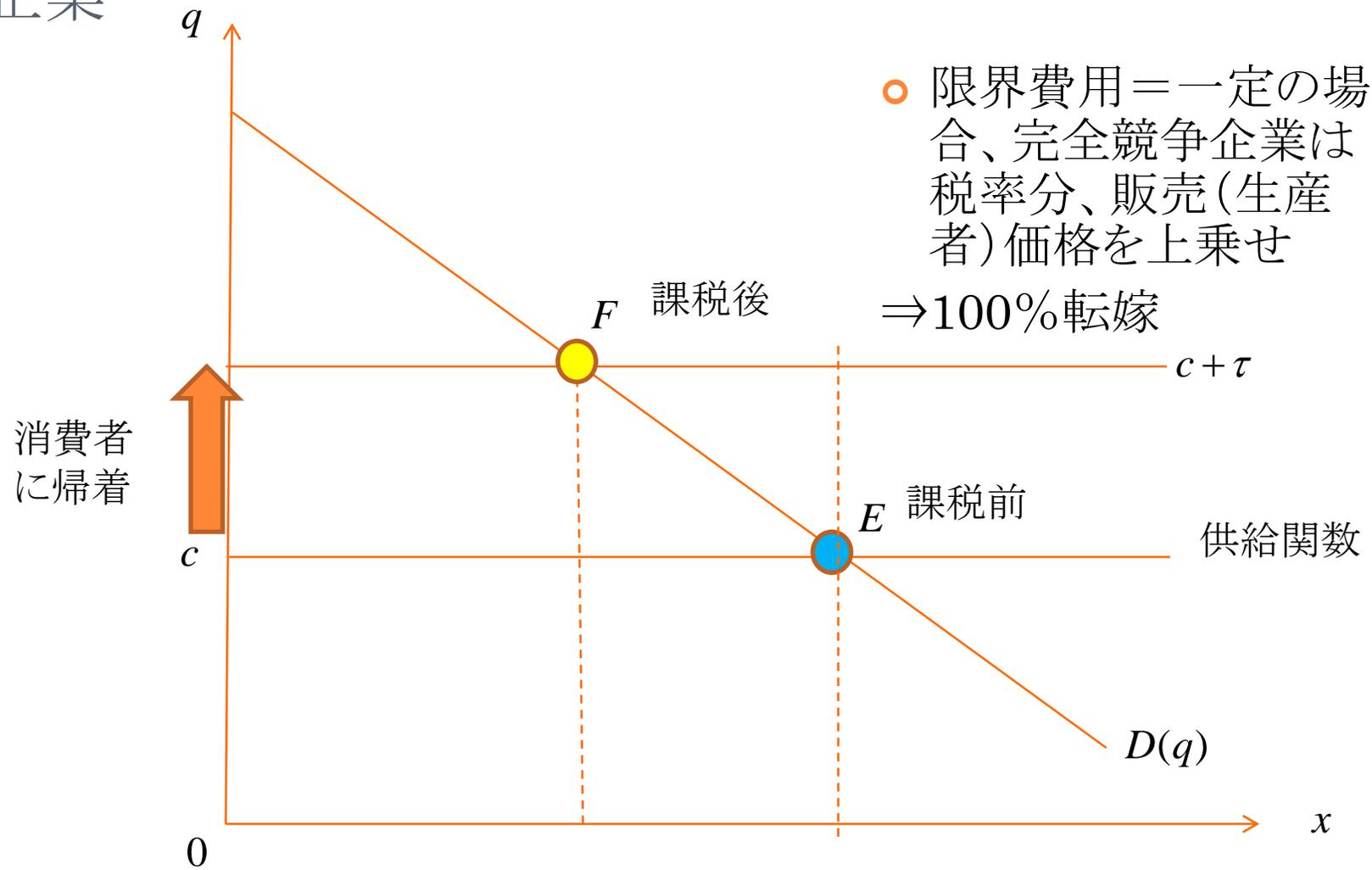
- ある財貨 =  $x$  を生産する独占企業を想定
- ✓ 財貨  $x$  に物品税
- ✓ 生産に係る限界費用  $c$  は一定
- 完全競争であれば、供給曲線は価格に対して無限に弾力的  
⇒ 物品税は全額 (= 100%) 消費者に転嫁



# 独占企業と価格決定



# 完全競争企業



# 独占価格と物品税

弾力性一定

$$\frac{q^m - (c + \tau)}{q^m} = \frac{1}{\varepsilon} \Rightarrow q^m = \frac{\varepsilon}{\varepsilon - 1} (c + \tau)$$



- 価格弾力性を一定とすれば、課税は独占価格(税込)を税率以上に引き上げる⇒消費者に**100%以上**の転嫁  $\frac{d}{d\tau} q^m = \frac{\varepsilon}{\varepsilon - 1} > 1$

線形需要関数

$$(q^m - (c + \tau)) \cdot b = a - b \cdot q^m \Rightarrow q^m = \frac{a + (c + \tau)b}{2b}$$



$$D(q) = a - b \cdot q$$

- ◆ 需要関数が線形であれば、価格の転嫁は**半分**  $\frac{d}{d\tau} q^m = \frac{1}{2}$

➤ 独占の場合、転嫁の程度は需要関数の構造(線形・弾力性一定)に依存



# 実証研究

$$Price_{it} = \beta_0 + \beta_1 Tax_{it} + \beta_2 HHI_{it} + \beta_3 Tax_{it} * HHI_{it} + X'_{it} \beta + \epsilon_{it}$$

↑ ガソリン小売価格

↑ 物品税

↑ 都市

↑ 集中度(独占度)指数

↑ 時間

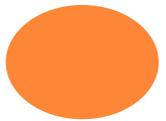
説明変数

集中度(独占度)が高まるほど、物品税に拠る小売価格の増加幅は減少

Dataset =monthly observations for the 1991-1997 period for the ten main cities in Canada

THE POWER TO PASS TAXES ON – TAX INCIDENCE IN THE CANADIAN RETAIL GASOLINE MARKET MARIO JAMETTI, AGUSTIN REDONDA 2012

	(6)
Excise	1.209*** [0.338]
HHI	106.2*** [37.76]
Excise_HHI	-5.224*** [1.740]
Wholesale	0.964*** [0.0392]
Unemployment rate	-0.288** [0.122]
Population	0.663*** [0.187]
Prop. aged 15 to 24	-0.278** [0.138]
Stations	12.65*** [3.557]
Gasoline cons. pp	-1.252 [3.173]
Average income	0.296*** [0.0856]
City FE	YES
Quarter FE	YES
Time trend	YES
Observations	840
R <sup>2</sup>	0.76



## 社会保険料と税等価

# 社会保険料の課題

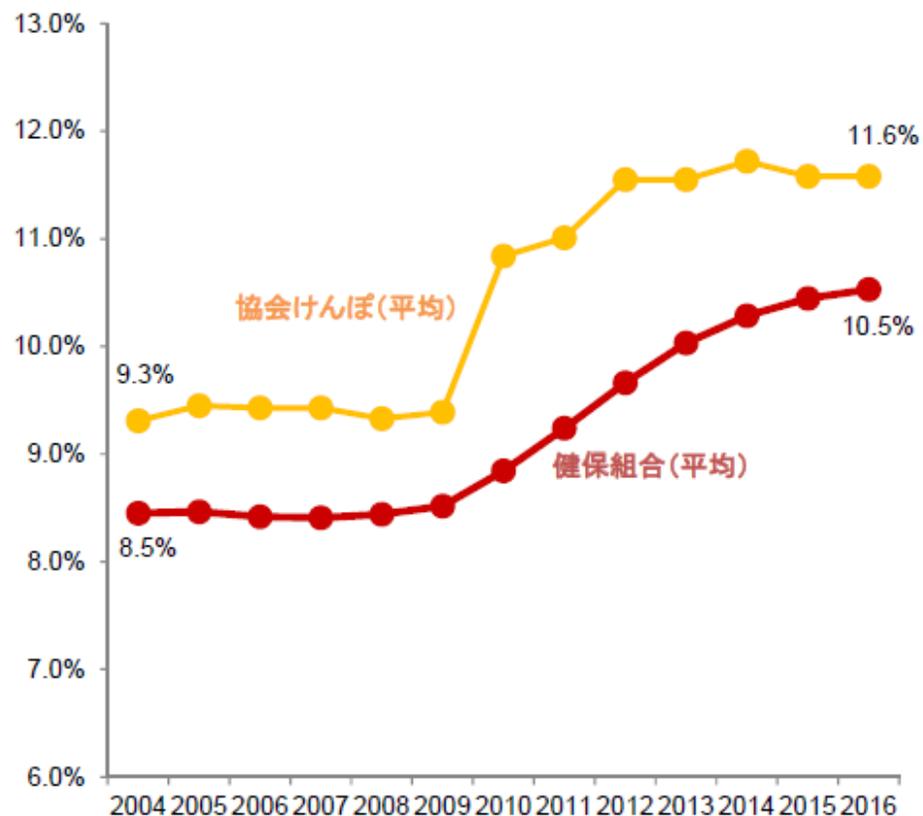
- その1:美しい建前とそうでもない現実
  - 建前＝リスクへの備え・世代間の連携
  - 現実＝逆進的な負担構造・世代間格差(勤労世代への負担の偏重)
- ⇒ 制度の**理念と実態**のかい離
  
- その2;実態として再分配化＝**租税化**する社会保険料
  - 社会保険料の多くは制度間移転に充当⇒受益と負担の関係は希薄化
  - ✓ 例:高齢者医療への拠出金・支援金
  
- その3:(正規)**雇用税**としての社会保険料
  - 事業主＝労働コストの増加要因⇒雇用を阻害
  - 労働者＝手取り賃金の低下⇒就労意欲を阻害(例:130万円の壁)



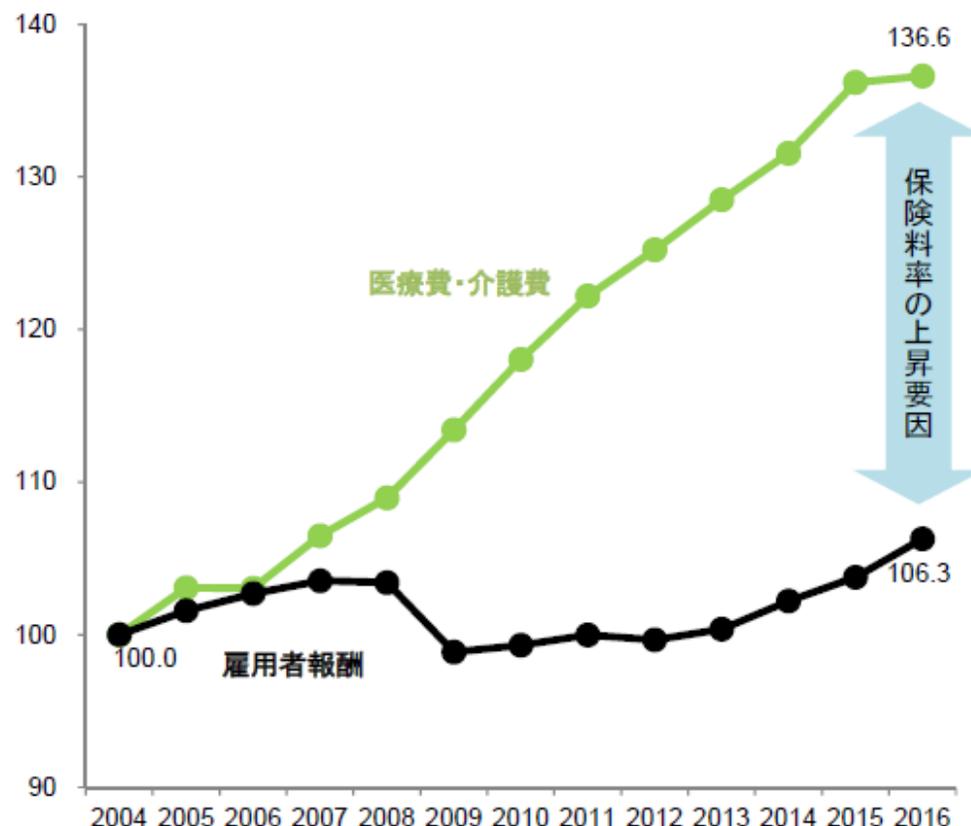
## 医療・介護に係る保険料負担について

- 今後とも高齢化により医療費・介護費の伸びは増加が見込まれるのに対し、雇用者の総報酬は、生産年齢人口の減少に伴い大幅な増加は見込めない。したがって、仮に医療費・介護費の伸びを放置すれば、今後も保険料負担の増加は免れず、雇用者の実質賃金の伸びは抑制されることになる。

協会けんぽと健保組合の保険料率



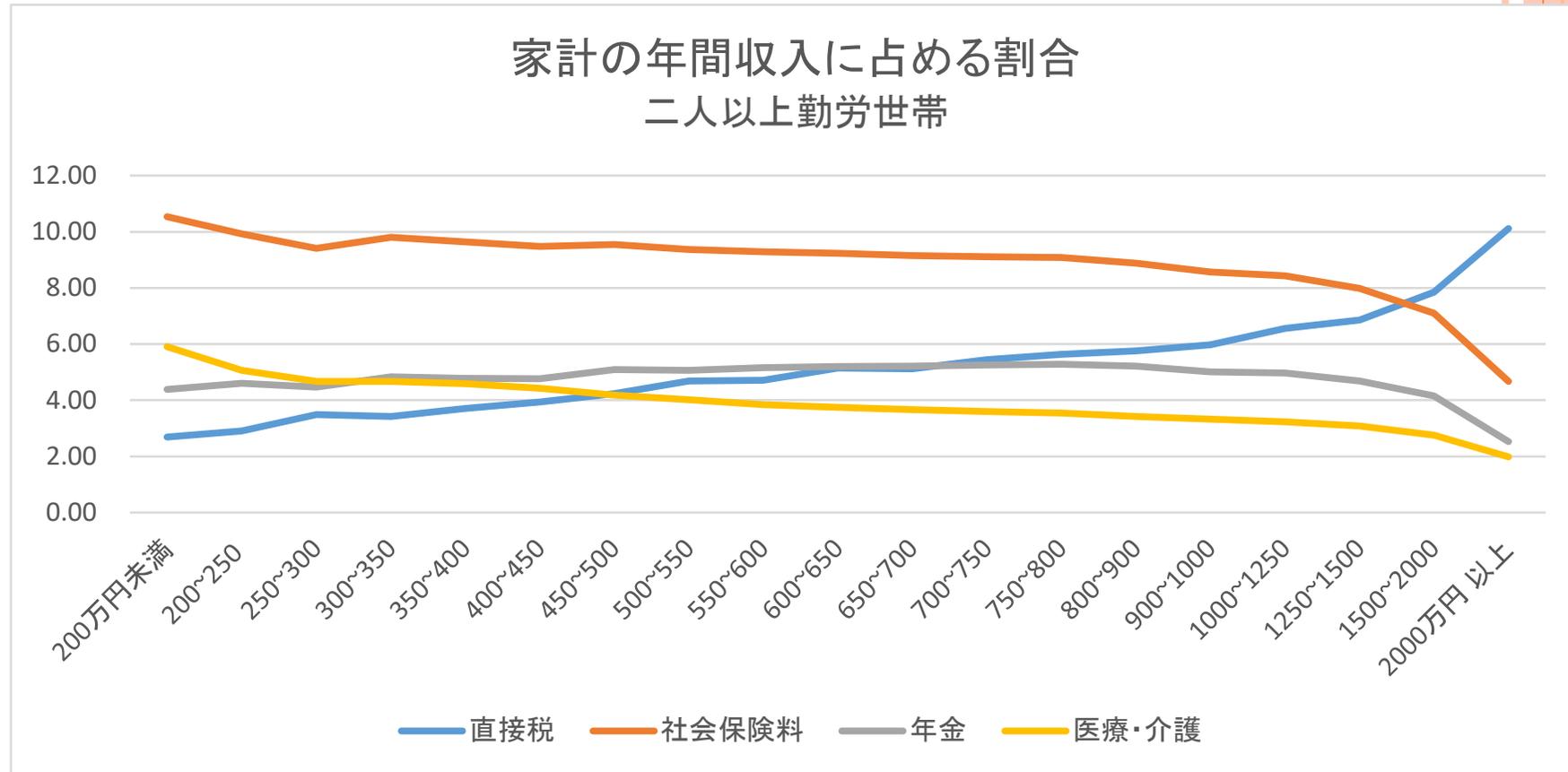
医療費・介護費と雇用者報酬



# 社会保険料は逆進的

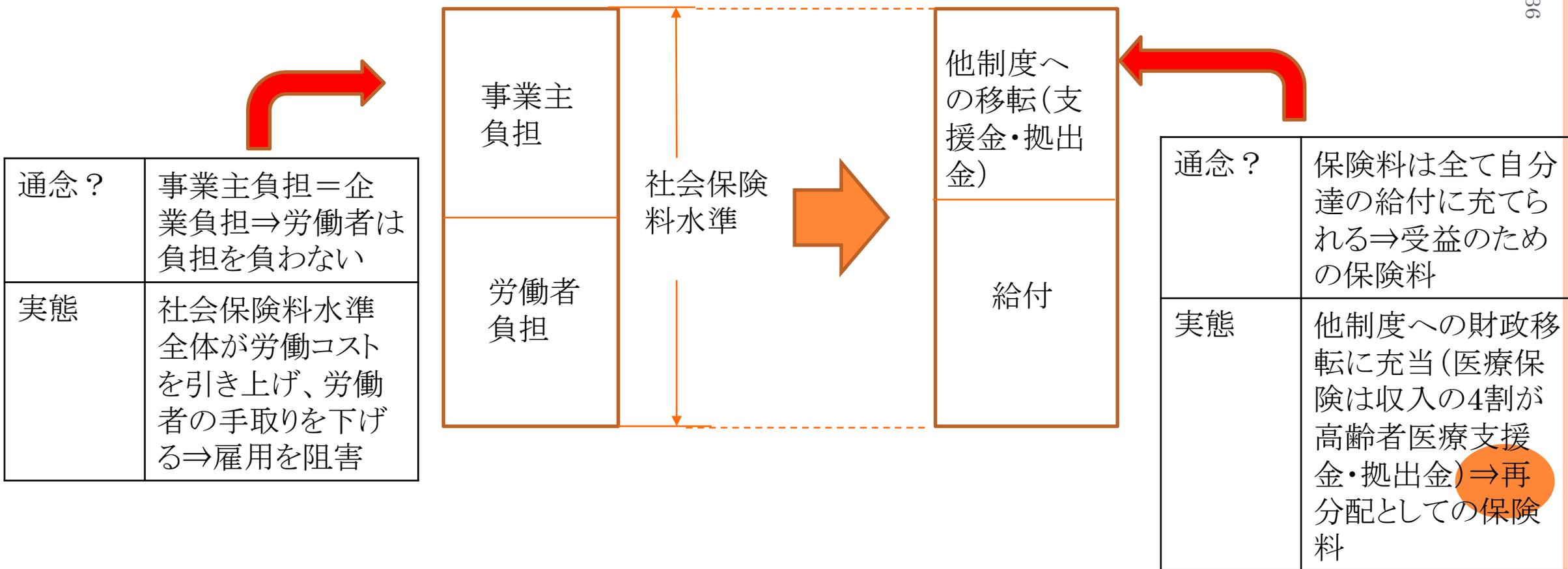
二人以上の世帯(勤労者世帯)

- ▶ 社会保険料は総じて**逆進的**
- 理由＝ワーキング・ペア(非正規労働)が(保険料が定額・均等割を含む)国民年金・市町村国保に加入



出所:全国消費実態調査(2014年度)

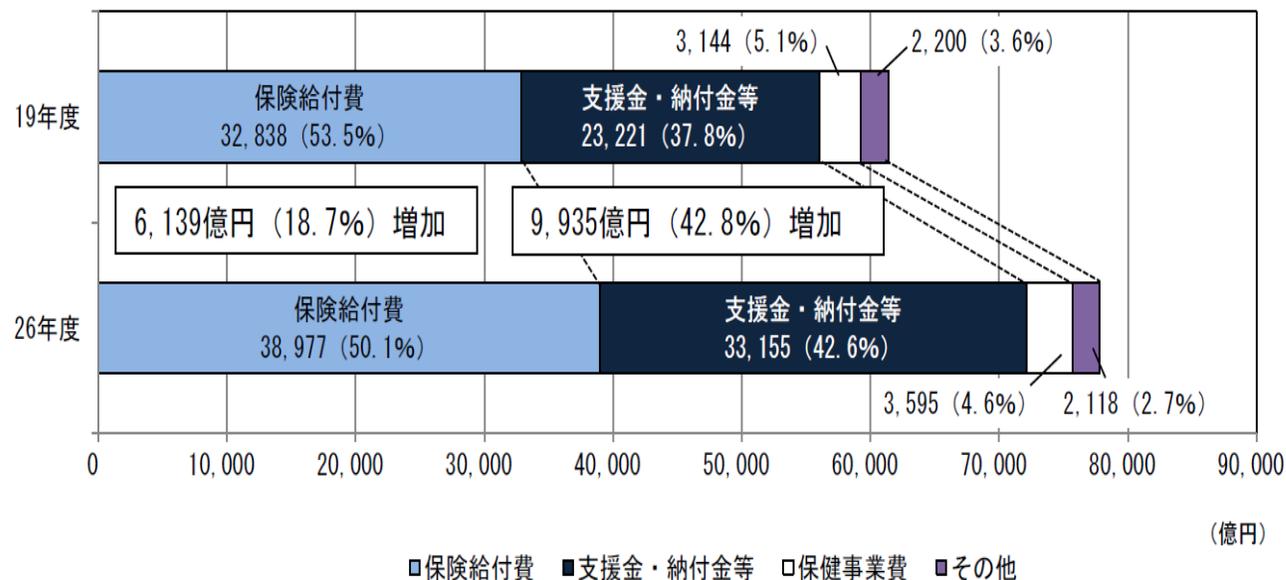
# 社会保険料の幻想(通念)と実態



# 保険料(医療)の使途

- 支払った保険料の多くは他の制度＝高齢者医療への支援に充当⇒制度間再分配≠給付と負担の対応
- ✓ 総報酬割＝再分配は強化の方向
- 保険者財政の圧迫要因に・・・

経常支出内訳の19年度と26年度比較

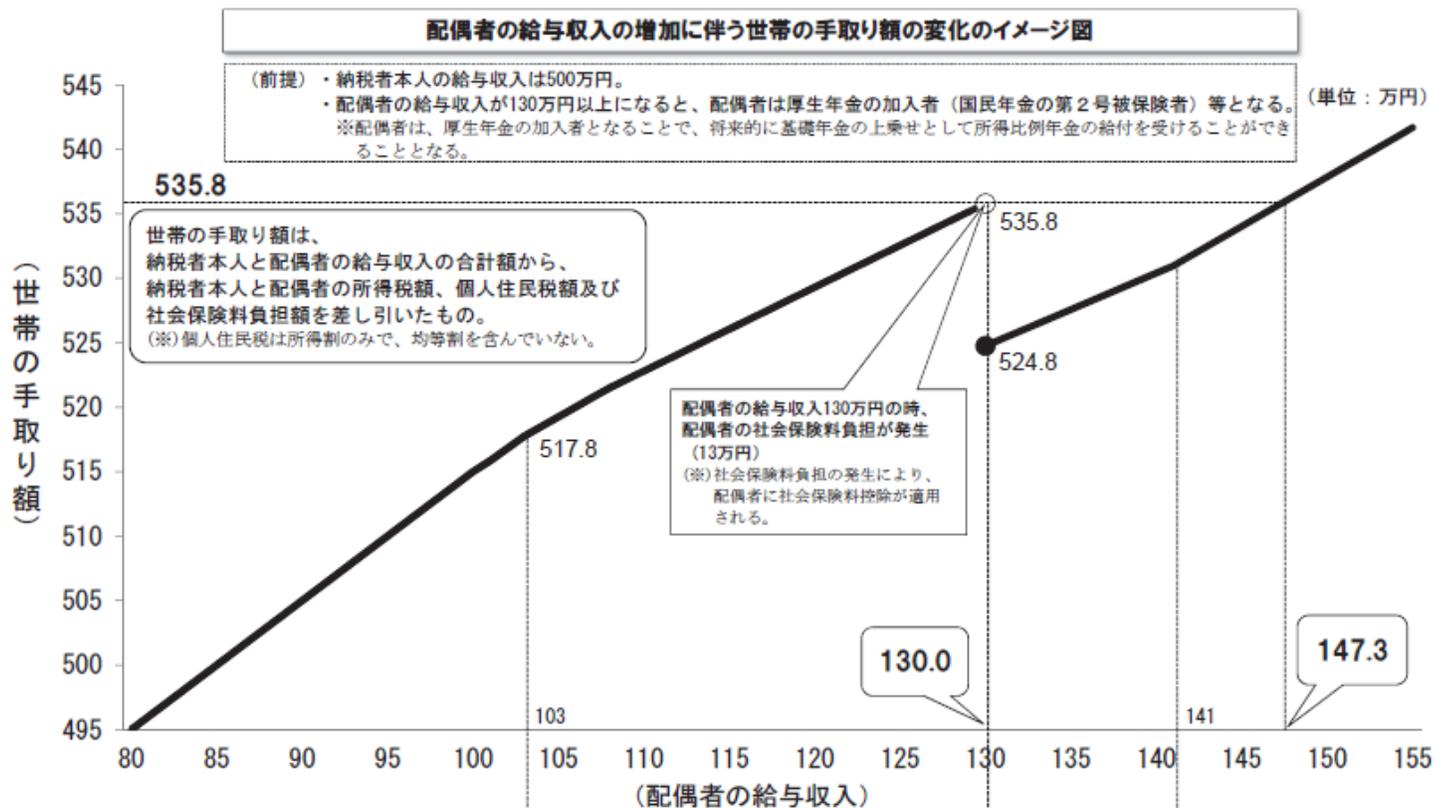


図表1 医療給付の財源

	収入合計 (百万円)	収入合計に占める収入割合(%)						収入合計に占める 支出割合(%)
		被保険者	事業主	合計	国庫負担	他の公費 負担等	他制度から の移転	
社会保険								
1.健康保険								
(A)協会管掌健康保険	8,803,454	43.2	42.1	85.3	14.5	—	0.0	42.2
(B)組合管掌健康保険	8,119,540	40.4	48.4	88.8	0.5	—	0.0	42.6
2.国民健康保険	13,156,592	26.7	—	26.7	28.6	13.1	28.0	19.4
退職者医療制度(再掲)	973,715	26.3	—	26.3	—	—	73.7	—
3.後期高齢者医療制度	12,561,870	7.2	—	7.2	32.0	18.0	41.4	—

平成 26 年 4 月 18 日  
健康保険組合連合会

# 参考: 日本の実効税率?



配偶者の給与収入	~103万円以下	103万円超~130万円未満	130万円以上~141万円未満	141万円以上~(配偶者の限界税率が5%の場合)
世帯の手取り額の変化 (配偶者の給与収入増加1万円当たり)	1万円 (~100万円) 0.95万円 (100万円~) ・配偶者の個人住民税負担が発生	0.67万円 (平均値) ・配偶者の個人所得課税負担が発生 ・納税者本人の配偶者控除が適用されなくなり、配偶者特別控除が適用される(段階的に減額)	0.57万円 (平均値) ・配偶者の社会保険料負担が発生 ・納税者本人の配偶者特別控除が段階的に減額	0.77万円 ・納税者本人の配偶者特別控除が適用されなくなる



## 参考:「働き方の選択に対して中立的な税制の構築をはじめとする個人所得課税改革に関する論点整理」

- 1990年代以降、・・・経済停滞の長期化の下で非正規雇用の拡大が労働の二極化や生産性の低迷をもたらす中で、より多様な働き方を可能とし、**女性、若者、高齢者を含む多くの人々が、意欲、個性や能力に応じ、希望を持って働くことができるシステムの構築**が求められている。
- **働き方の選択に対して中立的な税制**を構築するに際しては、所得税・個人住民税 において従来講じられてきた税制上の配慮のあり方を見直し、今後どのような世帯に税制上の配慮の重点をシフトしていくべきかについて検討を行う必要がある

平成26年11月7日 政府税制調査会



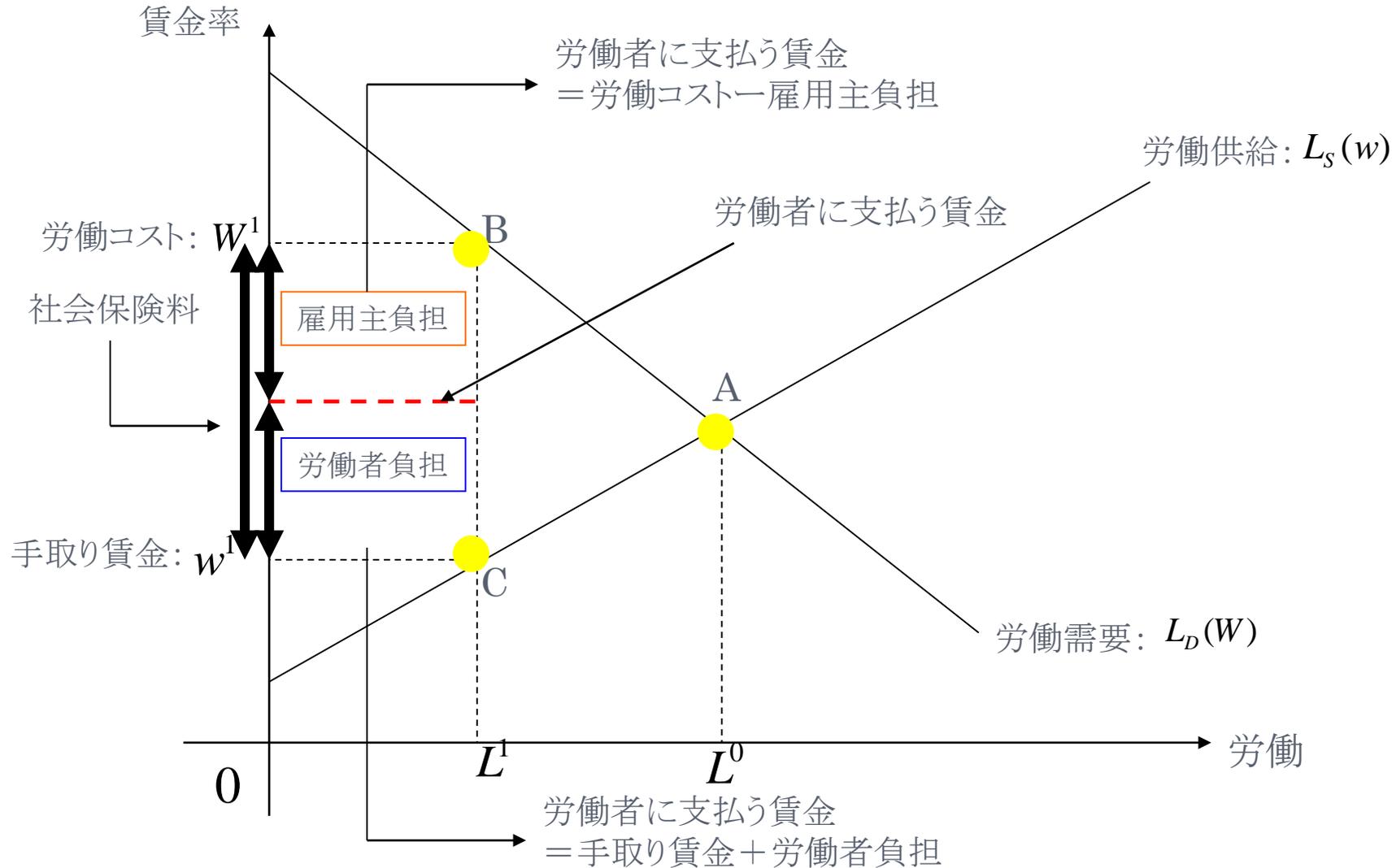
社会保険料も働き方への中立性を阻害



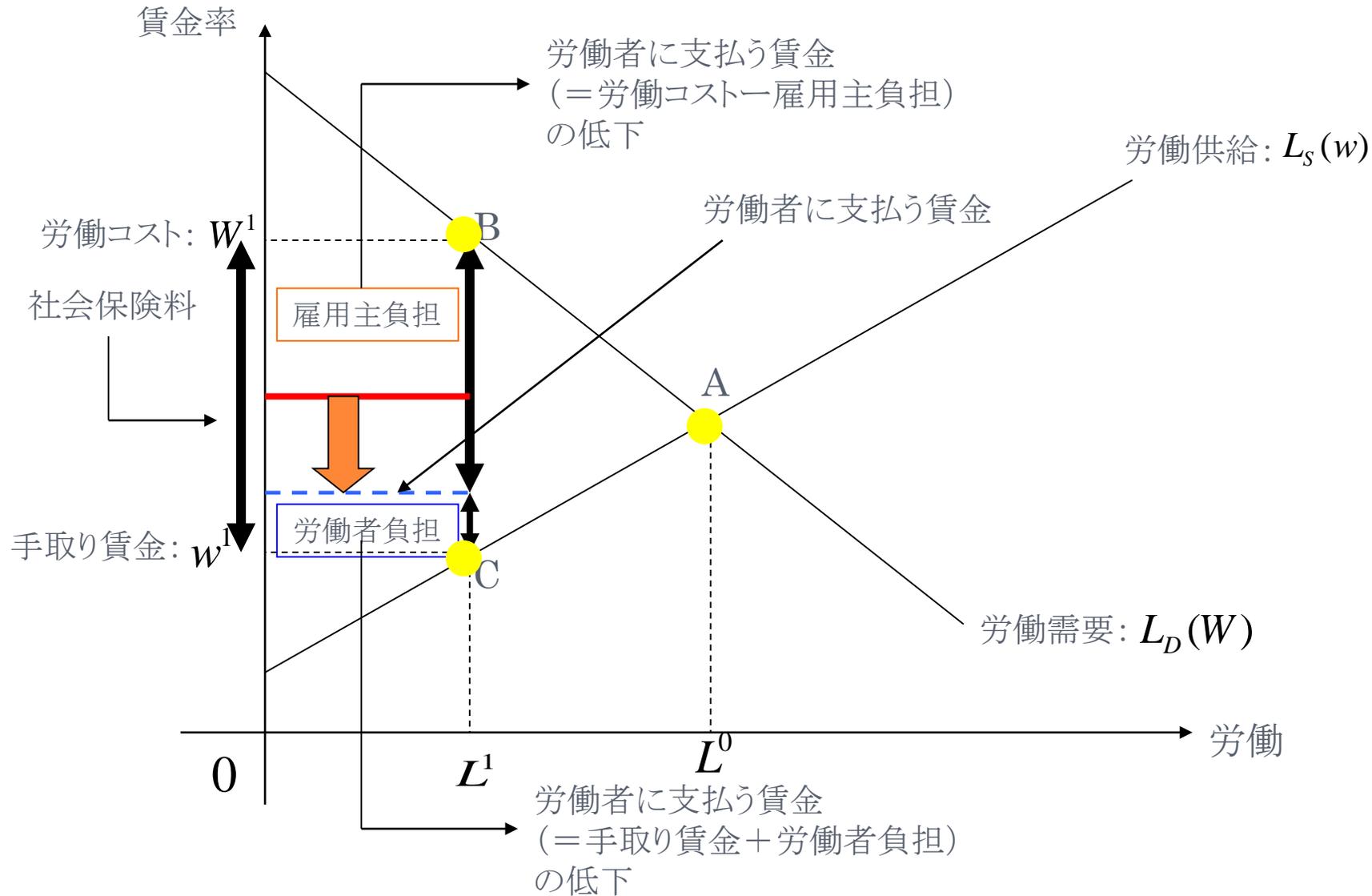
# 社会保険料労使折半

- 制度上、厚生年金、健康保険の保険料は労使で折半  
＝雇用主・労働者は半分ずつ保険料を「支払う」  
⇒
- 労働者・雇用主の社会保険料「負担」は半分ずつ？
- 保険料率を一定に、雇用主の拠出割合を引き上げれば、労働者の負担は軽減？
- 基礎年金の「消費税化」で雇用主拠出が減ることは雇用主のみの利益？

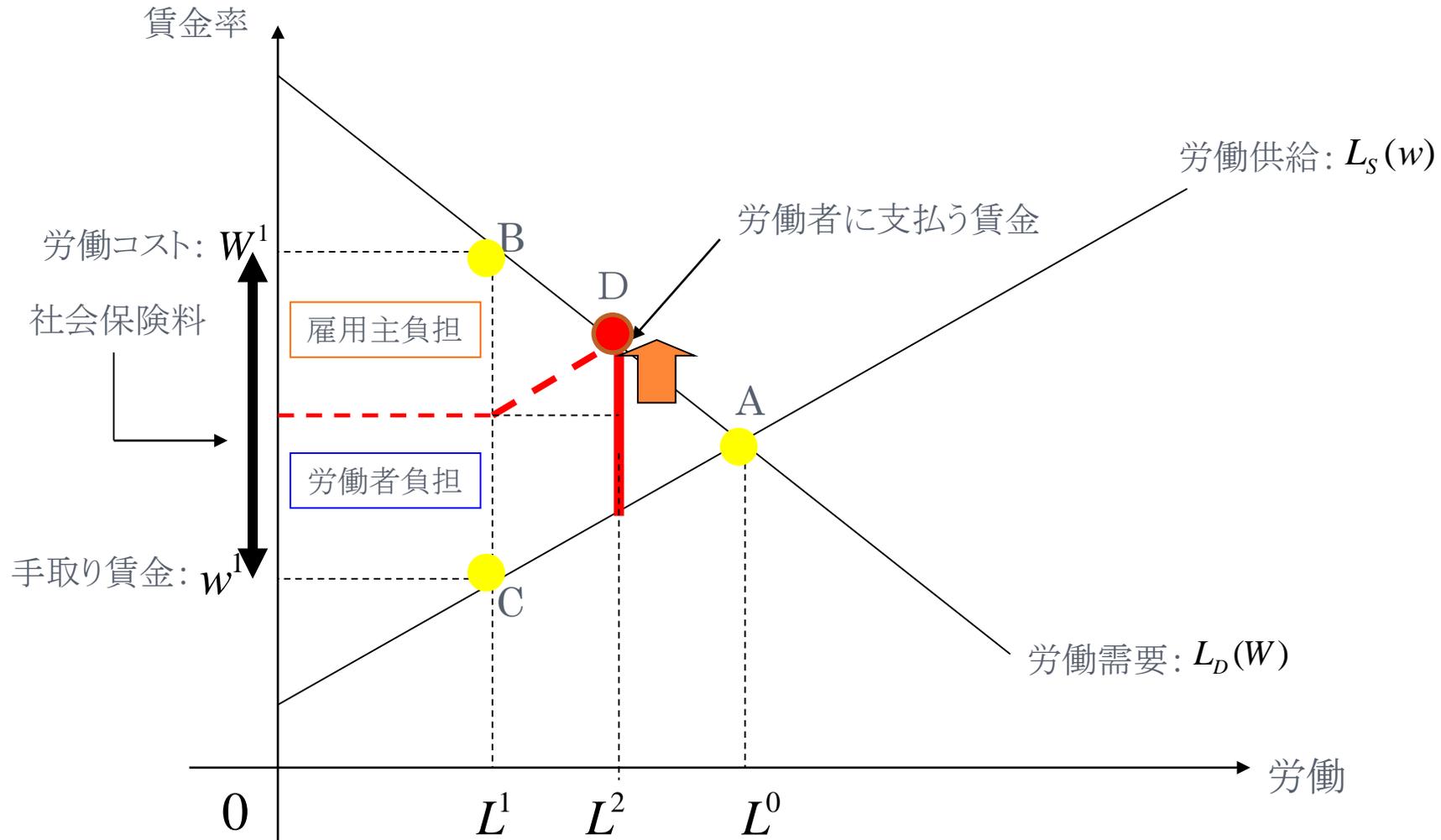
# 社会保険料の労使折半



# 社会保険料の労使折半



# 社会保険料の労使折半



# 社会保険料(事業主負担)の帰着

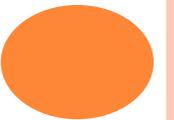
$$\log w = \alpha + t_j \beta + x\gamma + \varepsilon \quad (14)$$

表2 トレンドを加えた推定

実質賃金率 (対数値)	事業主の 保険料率(%)	産業別 GDP (対数値)	実質賃金率の 1期ラグ (対数値)	労働投入量の 1期ラグ (対数値)	トレンド	トレンドの二乗	R <sup>2</sup>
	0.019 ** (0.009)	-0.017 (0.018)	0.529 *** (0.057)	0.046 *** (0.013)	0.005 ** (0.002)		0.9407
(A) 制度合計	0.012 (0.009)	-0.018 (0.018)	0.530 *** (0.057)	0.041 *** (0.013)	0.008 *** (0.003)	-0.00007 * (0.000)	0.9411
(B) 健康保険	-0.008 (0.030)	-0.015 (0.020)	0.546 *** (0.058)	0.047 *** (0.013)	0.009 *** (0.001)		0.9367
	-0.163 *** (0.047)	0.016 (0.021)	0.507 *** (0.057)	0.017 (0.014)	0.020 *** (0.003)	-0.0003 *** (0.000)	0.9405
(C) 厚生年金	0.027 *** (0.009)	0.001 (0.019)	0.504 *** (0.058)	0.035 *** (0.013)	0.003 * (0.002)		0.9388
	0.025 *** (0.009)	-0.002 (0.019)	0.503 *** (0.058)	0.031 ** (0.013)	0.007 *** (0.002)	-0.00008 ** (0.000)	0.9395

岩本=濱秋(2006)「社会保険料の帰着分析:経済学的考察」

# 消費税と税等価



## 税等価という考え方

- 税等価＝制度的には異なっても同じ経済効果を有した税
  - 「制度」ではなく、「帰結」に着目した税の分類化

### ➤税等価あれこれ

税目	税等価
消費税(付加価値税)	賃金所得税 (部分的に)外形標準課税
社会保険料	(正規雇用)賃金所得税
社会保険料・事業主負担	社会保険料・労働者負担
法人税	消費税＋賃金所得税＋資本所得税
補助金＝配る(ばら撒き)	税額控除＝取らない(減税)



## 消費税＝所得税

- 家計の予算制約式

$$(1+t)p_x x + (1+t)p_y y = I$$

⇒

$$p_x x + p_y y = \frac{1}{1+t} I = \left(1 - \frac{t}{1+t}\right) I$$

- 税率 $t$ の消費税は税率 $t/(1+t)$ の所得税と「税等価」⇒同じ経済・誘因効果
- ただし、この所得税は「累進的」ではない。
- 直感:所得は(いずれかの時点で)消費される



# 消費税 = 生涯所得税

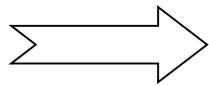
今期の貸金所得の他  
親からの相続、過去に  
蓄積した資産を含む

$$(1+t)C_1 + (1+t)\frac{C_2}{1+r} = I_1 + \frac{I_2}{1+r}$$

今期の消費  
(税抜見)

将来消費の現在価値

生涯所得(課税前)



$$C_1 + \frac{C_2}{1+r} = \left(1 - \frac{t}{1+t}\right) \left(I_1 + \frac{I_2}{1+r}\right)$$

所得税率

資本(利子)所得は  
非課税



## 参考：生涯所得と派生所得

賃金所得(+相続)

$$C_1 + S = I_1 \quad \text{第1期(若年期)}$$

第2期(中高年期)

$$C_2 = (1+r)S + I_2$$

資本所得=派生所得

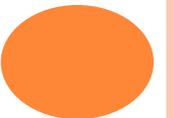
$$\Rightarrow C_1 + \frac{C_2}{1+r} = \underbrace{I_1 + \frac{I_2}{1+r}}_{\text{生涯所得}}$$



# 消費税 ≠ 所得税

- 生涯予算ベースで見ると消費税は資本(派生)所得には課税しない⇒賃金所得課税 ≠ 包括的所得税
- 既に貯蓄・資本のある個人(高齢世帯)にとって消費税はこうした貯蓄・資本への課税 ⇒ 今期の所得は少ないが貯蓄を取り崩して生計を立てる世帯への課税

	(包括的)所得税	消費税
新しい貯蓄(資本)	課税	非課税
古い(既存の)貯蓄(資本)	収益への課税	元本を含めて課税



## 参考:消費税の世代間移転効果

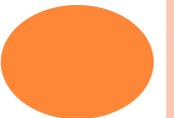
- 消費税は現在、勤労所得を得ていない退職世帯(高齢世代)に対しても課税⇒世代間再分配効果
- 2期間モデルの場合:
- 家計は第1期(若年期)に労働供給、第2期(高齢期)には退職して、貯蓄+利子所得を取り崩して生計を立てる

➤ 所得税

$$C_2 = (1+r)S - \tau rS = (1+r(1-\tau))S$$

➤ 消費税

$$\Rightarrow (1+t)C_2 = (1+r)S \quad C_2 = \left(1 - \frac{t}{1+t}\right)(1+r)S$$



## 消費税(まとめ)

	通念	実際
納税	小売段階(消費者)	各生産・流通段階(事業者)
課税ベース	消費	付加価値=売上一仕入  ⇒最終的に消費課税
公平性	逆進的	生涯所得ベースで見れば比例的
課税	消費課税	消費課税、ただし、  ・若年世代=賃金所得税と税等価 ・老年世代=貯蓄課税に相当
課税地原則		仕向け地主義



# 消費税だけではない

- 付加価値税は消費税だけではない⇒外形標準課税も付加価値税の一つ

## 付加価値税の種類

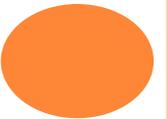
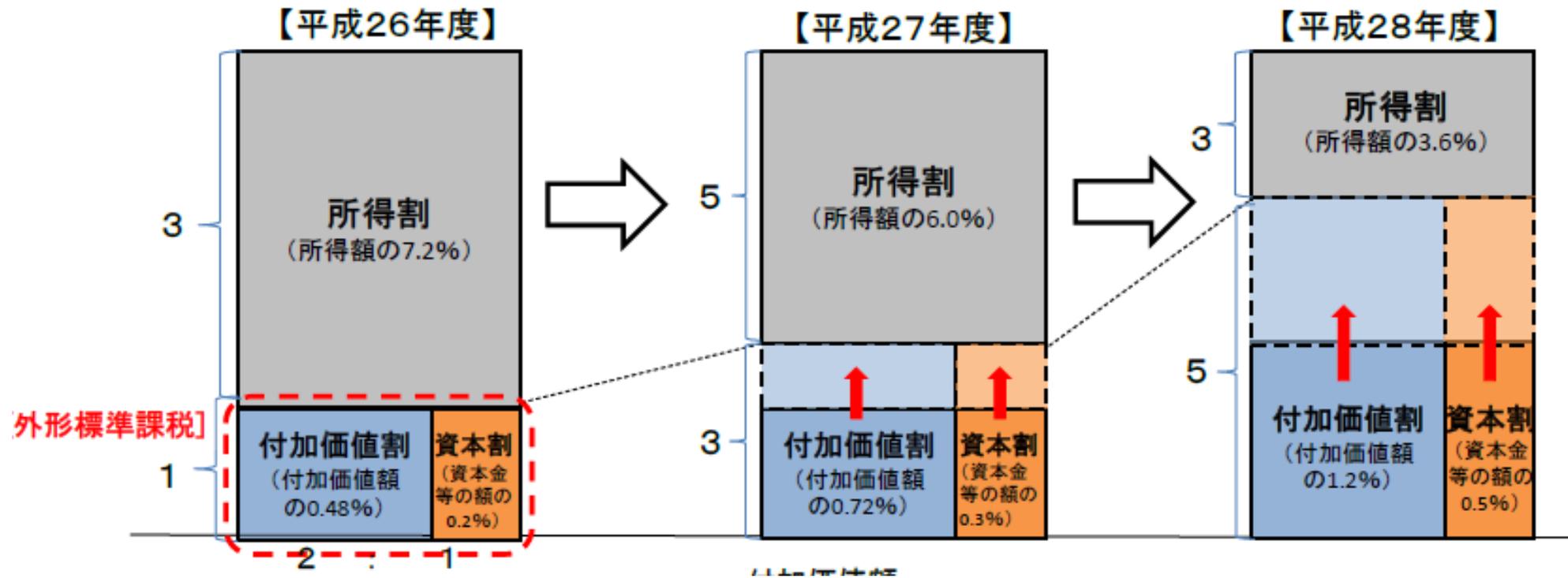
### 付加価値税の種類

種類	課税ベース	
GNP型 付加価値税	売上額－仕入原材料額	賃金＋利子＋地代 ＋減価償却費＋利潤
所得型 付加価値税	売上額－仕入原材料額－減価償却額	賃金＋利子＋地代＋利潤
消費型 付加価値税	売上額－仕入原材料額－資本財購入額	賃金＋利子＋地代＋減価償却費＋ 利潤－設備投資

出所:総務省資料

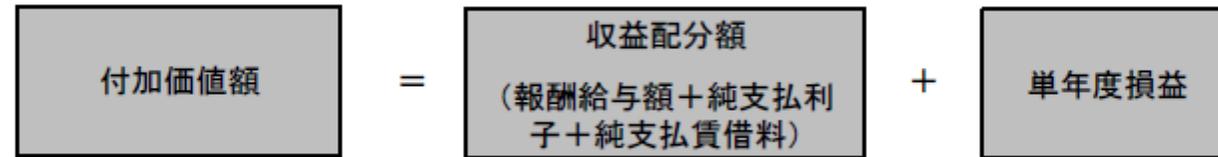


# 外形標準課税の拡充

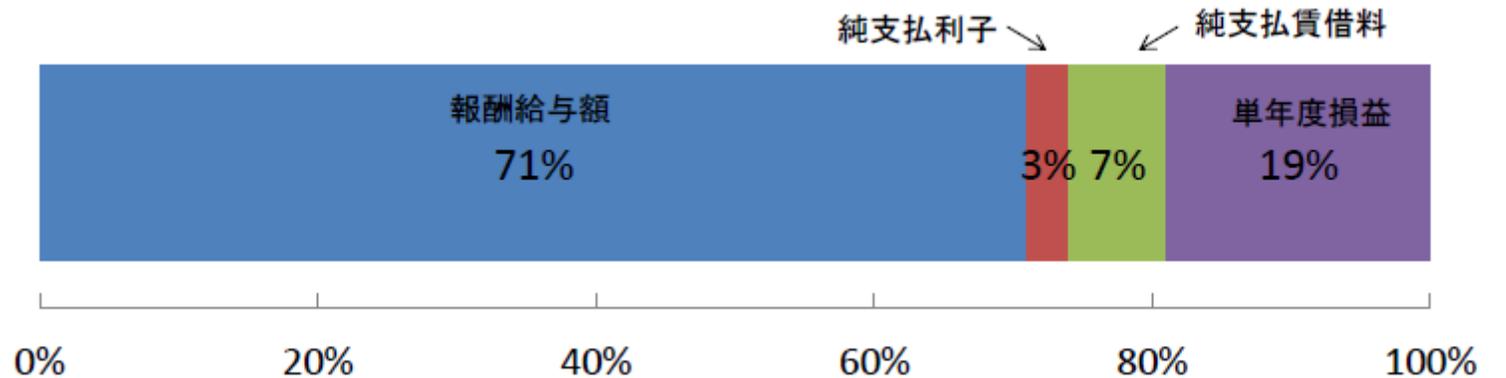


# 外形標準の課税ベース

$$\text{付加価値割額} = \text{付加価値額} \times 0.48\%$$



## 付加価値割の内訳



出所:平成23年度「道府県税の課税状況等に関する調」における  
課税対象額を基に作成

## 外形標準課税の二つの顔

製品への転嫁	外形標準課税 (所得型付加価値税)	課税地原則	税等価	
				課税地原則
あり	物品税	源泉地主義	消費税	仕向地主義
なし	所得課税		・(概ね)金融所得税 ・賃金税	居住地主義

- 人件費課税としての外形標準課税＝源泉地主義・法人段階の賃金課税
- 消費税も転嫁しなければ、人件費課税にあたる
- ✓ 人件費が付加価値の多くを占める

